



初素玉の月
つぎ 玉 厚の 月





橋塘伊東夏三作

上



4555



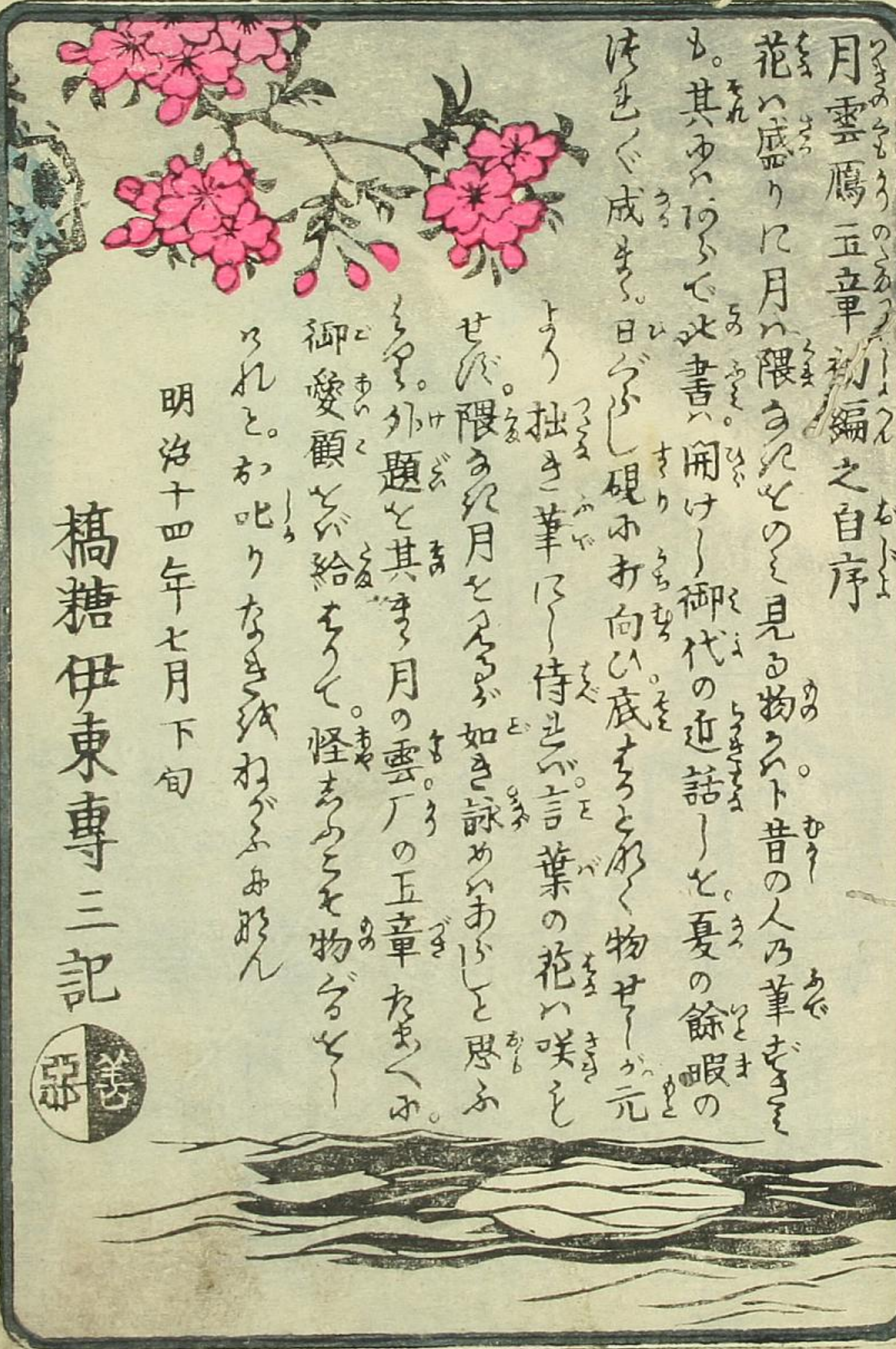
<48-8338>

月雲鴈五章初編之自序

花の盛りには月の隈をたのしみ見お物うと昔の人乃筆をきき
 も其のいづれに此書を開けし御代の近話しと夏の餘暇の
 清色に成まじ日づし硯にお向ひ底をたのむ物せしが元
 より拙き筆に侍ま言葉の花の咲き
 せは隈を月をえらぶ如き詠めあはしと思ふ
 外題を其ま月の雲の五章たたく
 御愛顧を給まると怪まらざる物な
 りれとお叱りなきは誠におおん

明治十四年七月下旬

橋糖伊東專三記



節婦阿道



因拈

女中もいささかきりやうなる
響りけりやとてさうり

おの法華經

荒川妻阿園

屏翳浮雲結
夜蔭素花飄
墜惡氛沉

清淵子



荒川義信

江島新兵衛

佐藤五章



春風柳李

花冨日

秋露梅相

花冨日

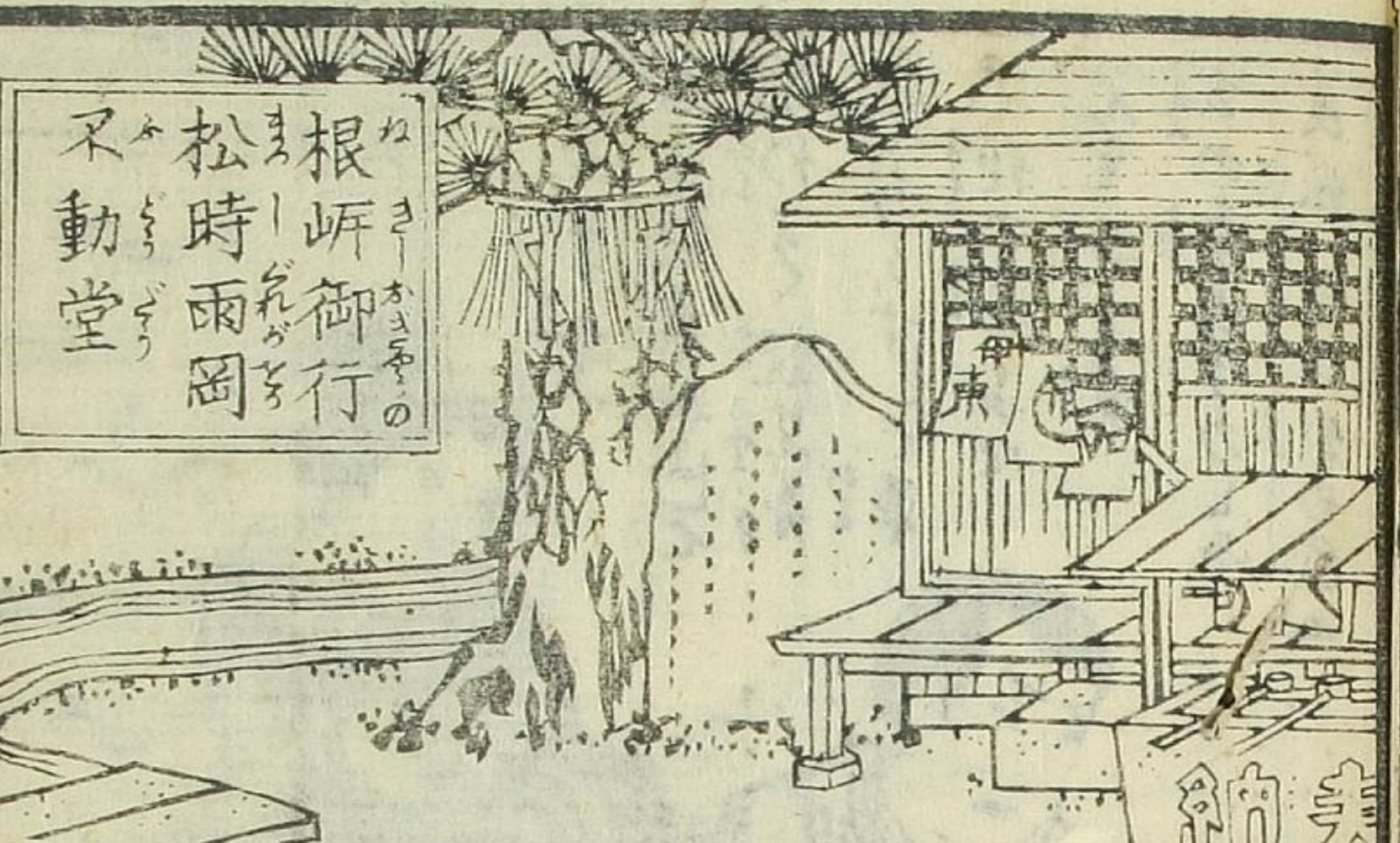
享藤五

月雲馬五章初編

東京 伊東橋糖編輯

發端

東京府下ありあるれど静かな地とて其地の
物産も多しといふも其地の根の根の望の望の
辺り合杉村小佐原とて風物も多し西蔵
あり家にもありねど其地はね静かな地と
荒川最上へ妻のお屋とて個が中かおと
りる始ありて始治十一年の生まへお及六八の
花盛り容融の良悪のそりば志操もいと
優しくお祝ふ事ありお祝ふ事ありお祝ふ事あり
取りお祝ふ事ありお祝ふ事ありお祝ふ事あり
家の脊戸の首ありお祝ふ事ありお祝ふ事あり

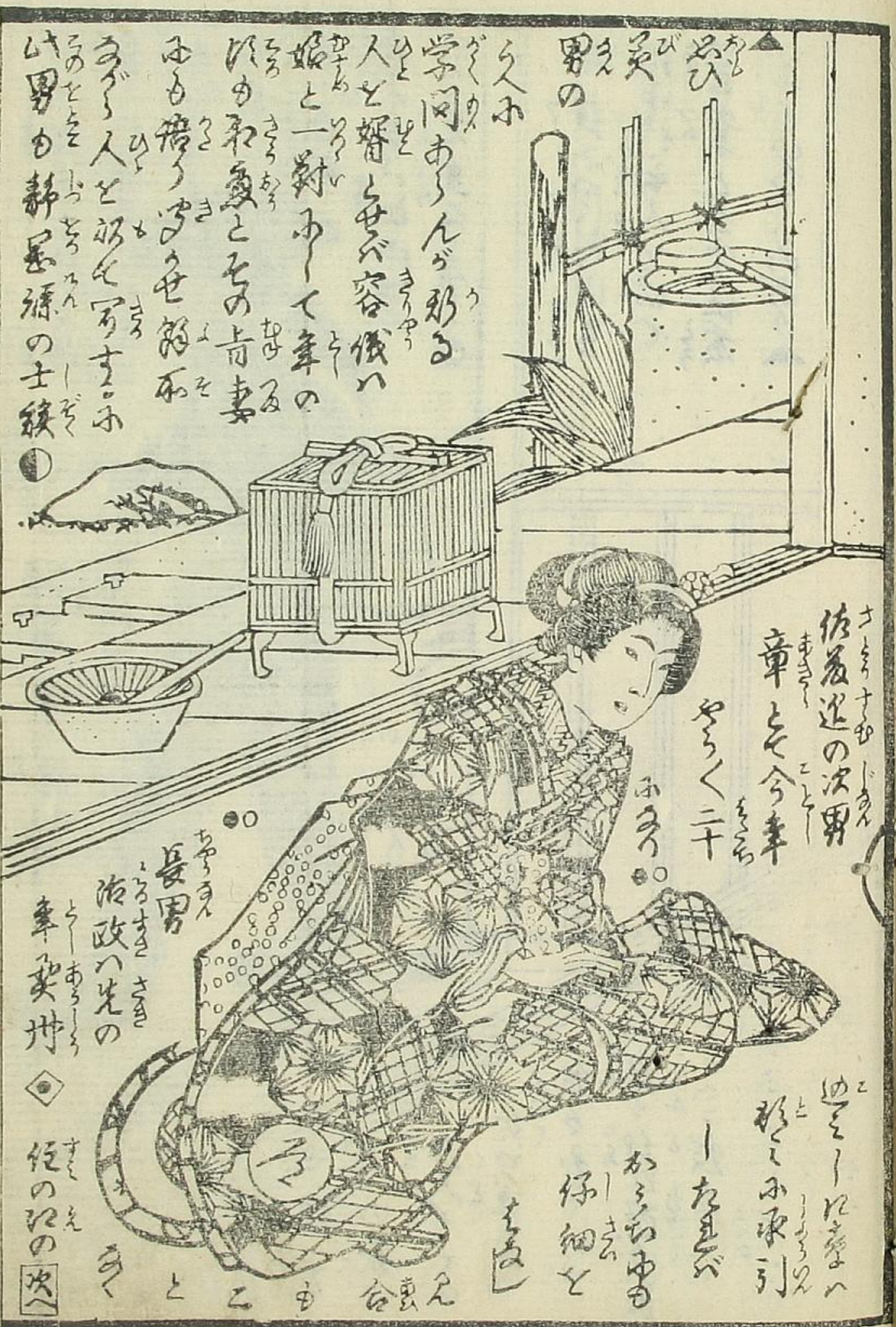


根崎御行
松時雨岡
不動堂



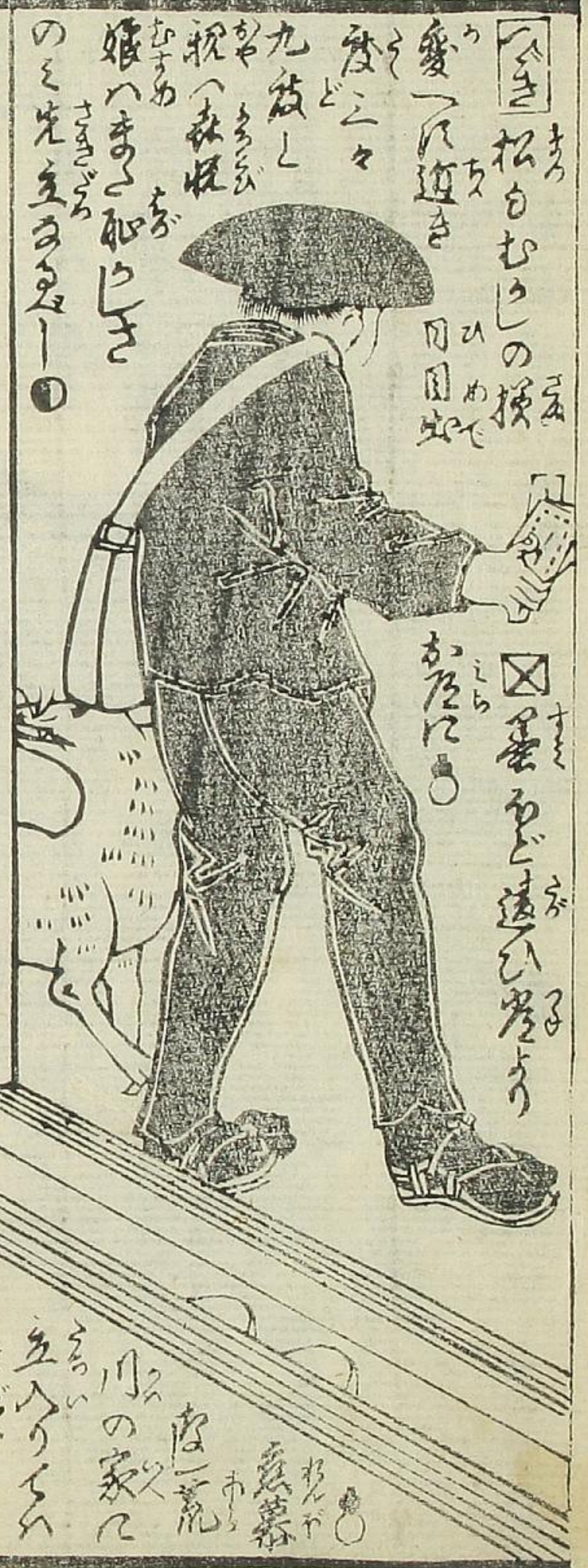
つぎ 年表
 義乃れと稗和はて
 品乃れと親兄弟
 さへあらずして車
 足位の谷子に
 足気毎も候
 虫の勢るすのそあ
 長恨の世ふれ母愛

◆ 會津へ送れせしき
 今迄に生死ハ知れ親
 進ハ三年前に世を去
 て今迄に業由るは
 外に為る業由るは
 少一の家縁を
 公候とてその
 利子とてわつて
 貸しく貸し
 只文庫小のそ
 んと承知ぬとせし
 候々もあつく
 増殖の義と云ひ



久小
 学問あつんが那る
 人と婿と各々容儀ハ
 娘と一對あて年
 此由和愛とそめ青妻
 子も指すゆを節不
 る人にとびをすすふ
 け男も静屋源の士候

依後述の次男
 章と今奉
 やらく二十
 長男
 治政ハ先の
 奉和州
 任の如の次
 一たは
 かまの中
 仔細と
 とこ由合



松白むじの換
愛つね道き
度ど々々
九段し
祝へ森様
婿へまゝおしき
のと先まゝなまー

● 茲小同村同室
枕巾代々人せぬて
惣業とるす伍者
亭とゆるのあり

川の家
夜々なりし
おたのむに
のとうまう後
おたのむに
おたのむに



▲ 是れ人の長ふぬえ紙業も
免解まぬ不備平凡と
ふあめあて身の久事の時
業と著しく事子もあふぬ
まされどむハ生と

ては婚姻の林ユレ
指儀者
せえ
はれ
て

一ひより笑つ申とあり
隠れその傍に忍び居る

さし給うとて何事
強め四の形くゆ權と

封にまどたつきて
幕の陣つりそふ

しく別りつ
先期云々の

軍ありて紀
まが間違之

由志持
武勇成

かほと彼の
消息を聞き

そわいあ
丹函綴

その外あ
千軍百の

その中を
奪

奪

不審生の歩
此心

途
この所

西光
久に及に

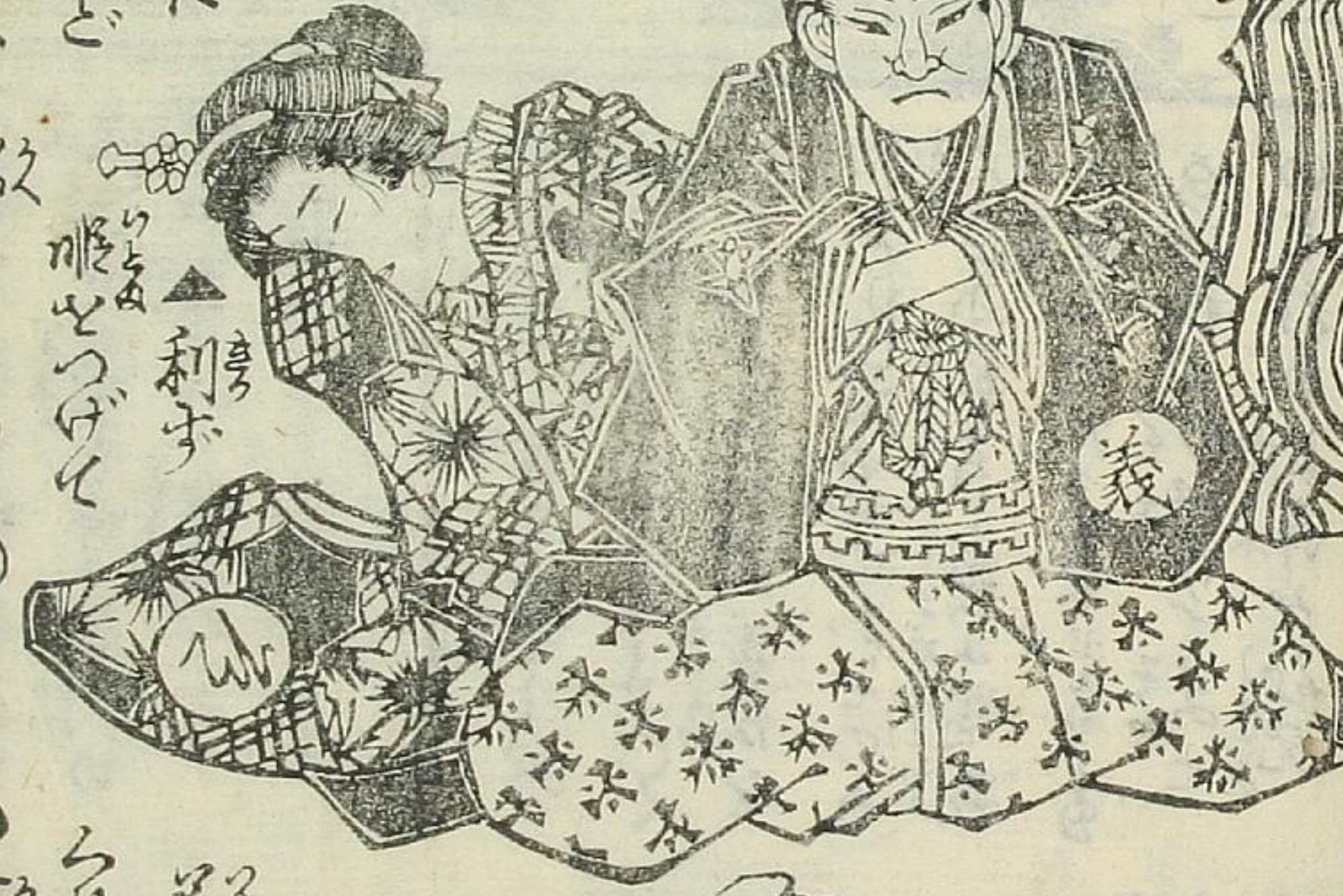
後風雨
腕づり

のそふ
貴年春

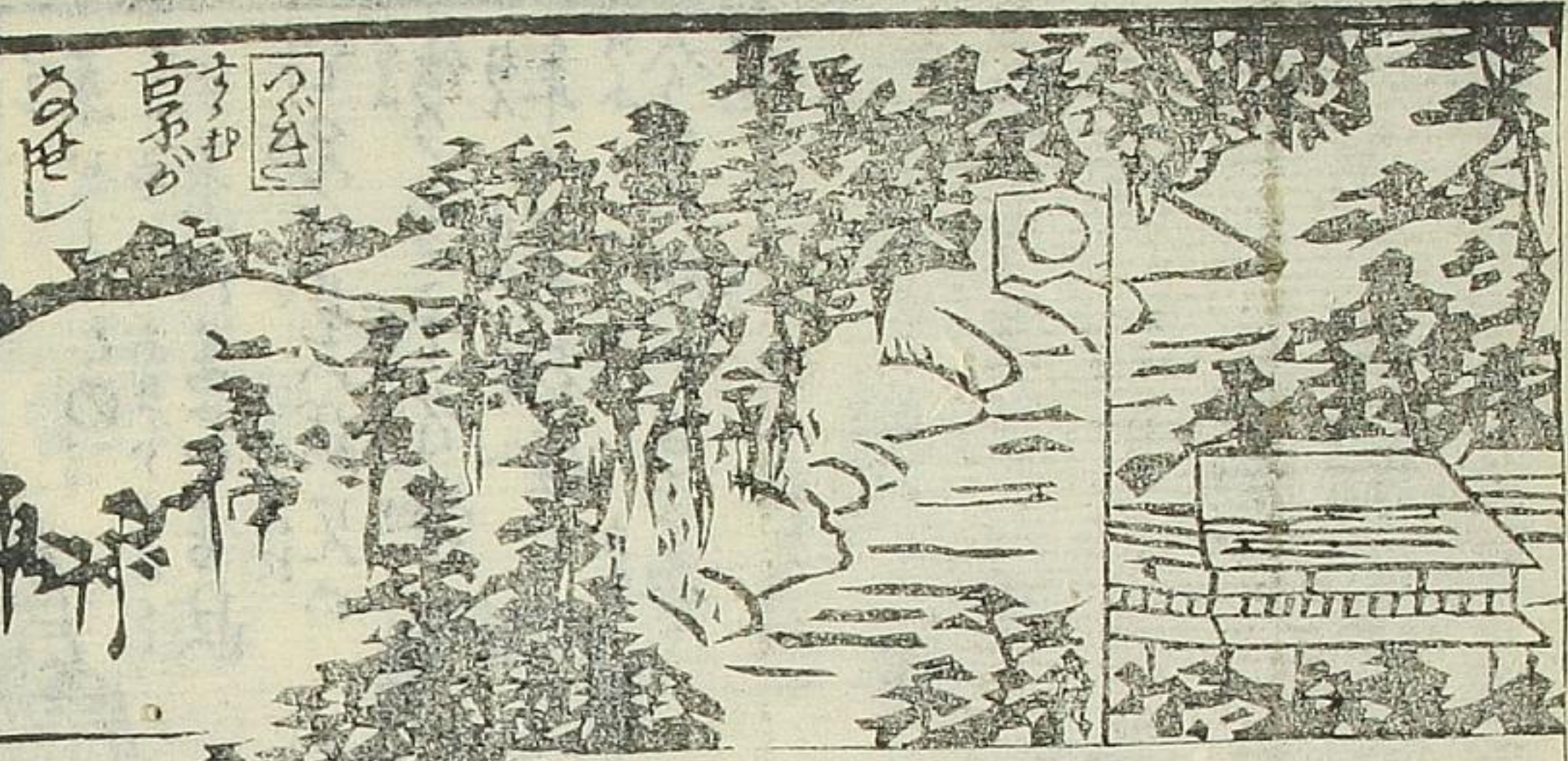
地七橋
響一



未せーとの
玄雲にまの書状
とるは是れ我兄の
傍りあて十方路
年の望を短へ
今日い如何るる者
目あて丁のつをさ
彩とて一居去の藩
武が放事も 務り
物とあつらふらひ
押のふりて受取の
仕舞うりと享のあへど
色あひのせはやく赤



上
路利由今
はそふ
思ふと東
おと死を
結のつ
の生方の對
面
素よ見方の
とあひて消息の
異は舟乗りて遇
ふれよとある文
の夜一
つ



安うとをまき小家と
 立かた藤家ある葉川の
 件小更りつ書状の事
 也余が二小連を巻るを
 速地以大岩村へ引んと
 されば室家小等一死
 致さぬ何おんあもよと
 愁も入るといふ後法を
 始めとして妻のおそのも
 大ま不替き寂は婿調
 も道つきたるゆゑさうとも
 白けれどおゆけてま
 いそねぬ夫婦が心死

その人がを死
 孫へ後の空止め
 何を言ひいふ手紙の
 如何に只涙のそは
 主あえく旅終り
 言て後法は手紙の
 申より紙幣何枚
 う取出しつ紙小包
 と紙あとして送る
 一とを妻の持しと
 叔父をを程に送るが
 やうく受けまが



新業
 まうと
 林
 舟の舟
 舟
 ツて大い
 おとら

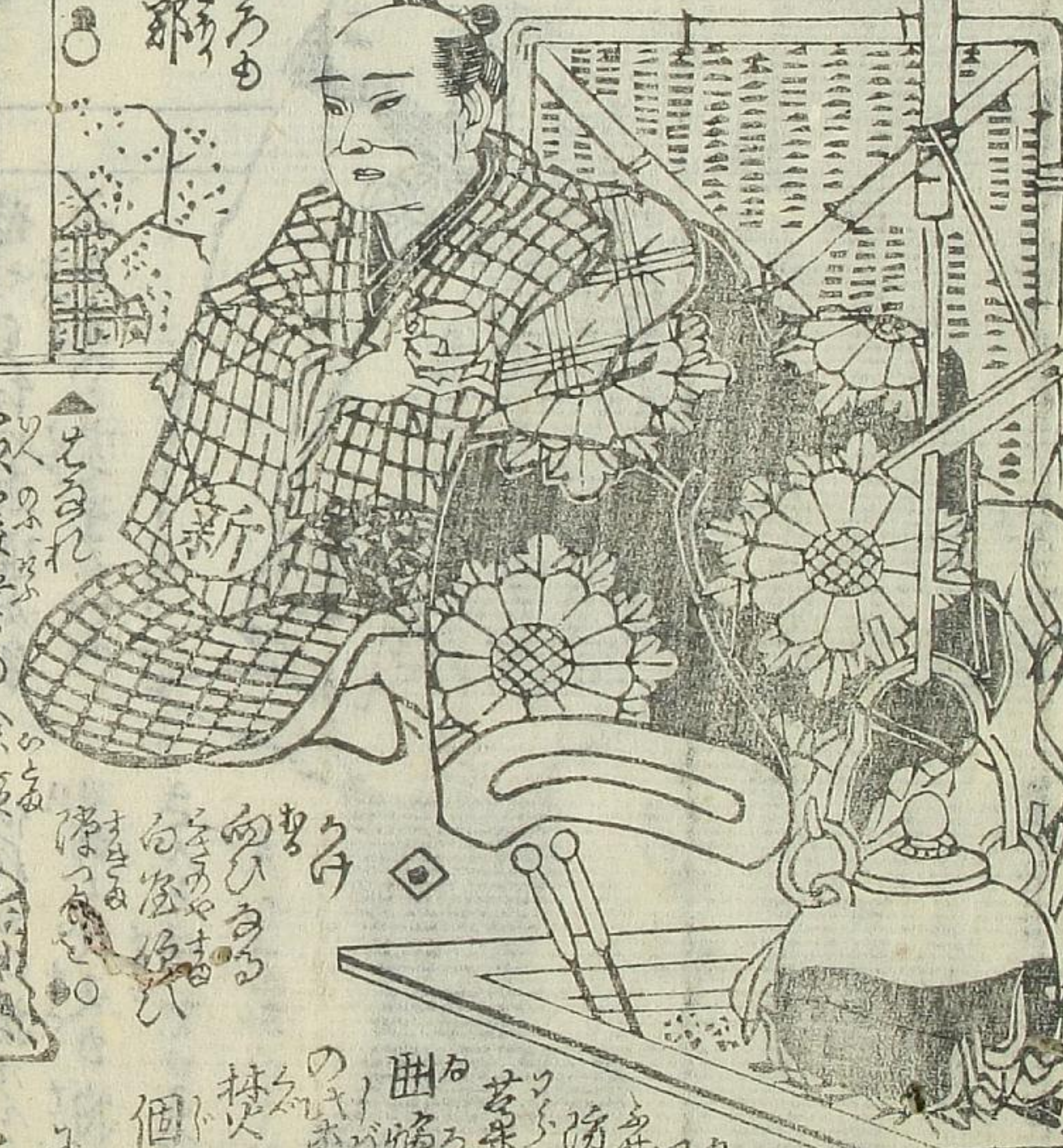
張て久し
 兄うが危急と云ふ若とされ
 頼更も於後いふはとは後由
 船不測つて用儀の合を懐中は
 船の舟を獨りめりなき

何れもれ機かんら
 日あふ又由船新致
 さんと決まるとる藤
 主あえおる三個の
 の空の妻の目もを
 風を悔極傘小除つ
 葉か如立せし
 年二月十日あり

藤玉章

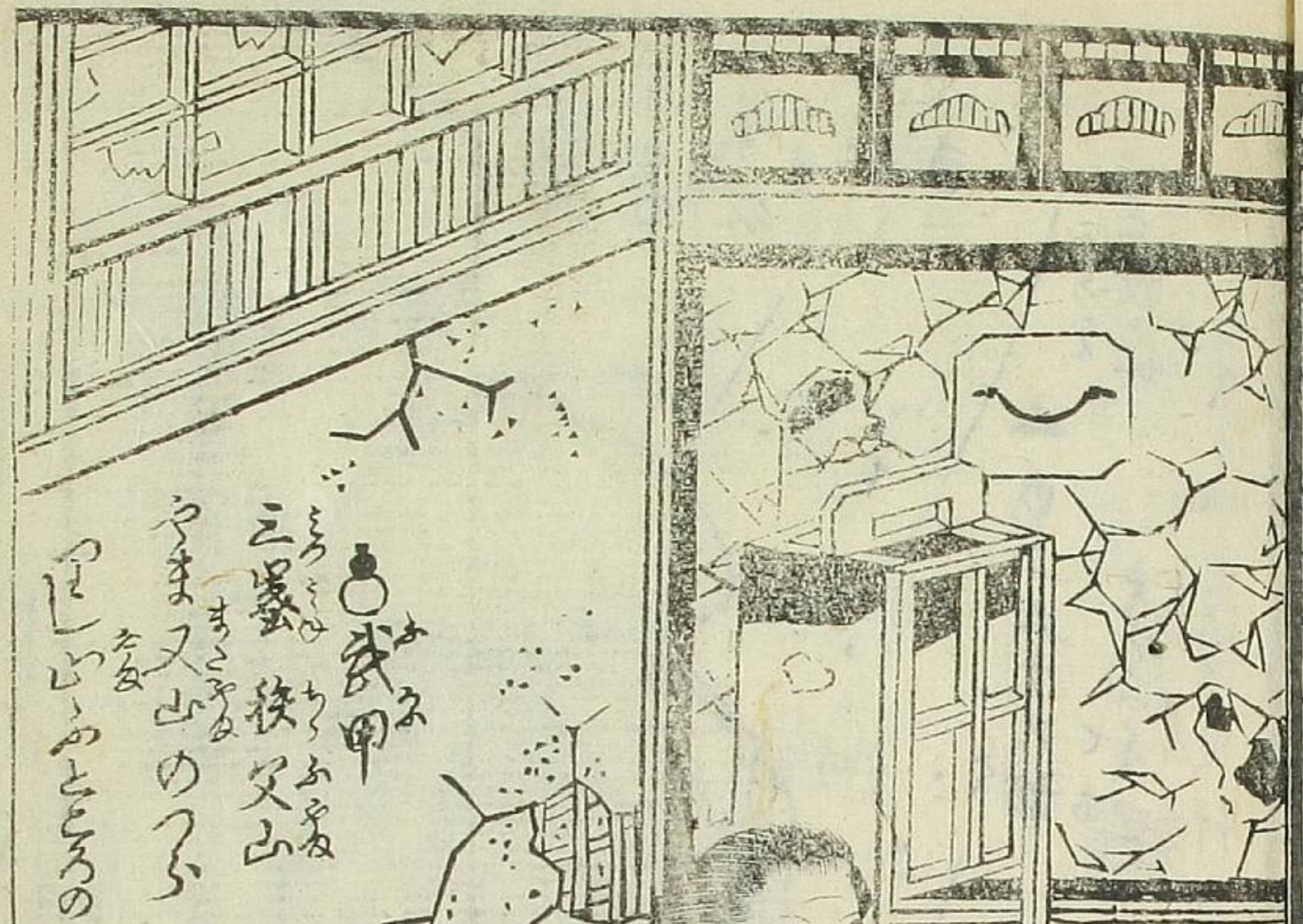
此所画解

○山里の小柴
あふあふ折えそ
かげゆゆりぬ夜
せの焼火実小
山望の油薪多
降つむきをを妙
のたせびめく
根世界らへさるも
むきり 糸あぶら
武義れのみ換父郎
のらちりしんく



とるれ
家農業の餘暇

うひある
そやま
白登候
深う
曲源
防ぎの
若床原
風を
次入る
も



○武甲
三峯 後父山
やま又山のつふ
ほいふとろの

あつた
世とら

○白個
元形 白登七
あつてふありの
その妻と
九
コレ
かた
今ま
如何
如何
さゆ次へ



つぎ
奉との
せふ
て
考
考

の
貢
の
の
の

の
の
の
の
の

中
卷
へ

荒磯割烹鯉魚腸

名八代目團十郎のはさし

久保田彦作著 守川周重画

舞の菊操鏡

渡辺文京作

三編 三編

金花胡蝶

渡辺文京作

三編 三編

冬見立闇鳩

守川周重画

三編 三編

深塩草近世奇談

藤田仙果作

三編 三編

舎錦繪問屋

地本 錦繪

日本橋區西國吉川町五番地 青盛堂 加賀屋

堤吉兵衛



初編 章 雁玉 月雲



馬三章刀中

上之巻より
多きもの
今夜も十時
さゆゑに
とわねて海と
まゝと空に
とて
森と
と



昔の通り
梅の
の
立あがる
の方
の
何やら
幸ふ
と
附
附



月

雲
層
結

玉
素

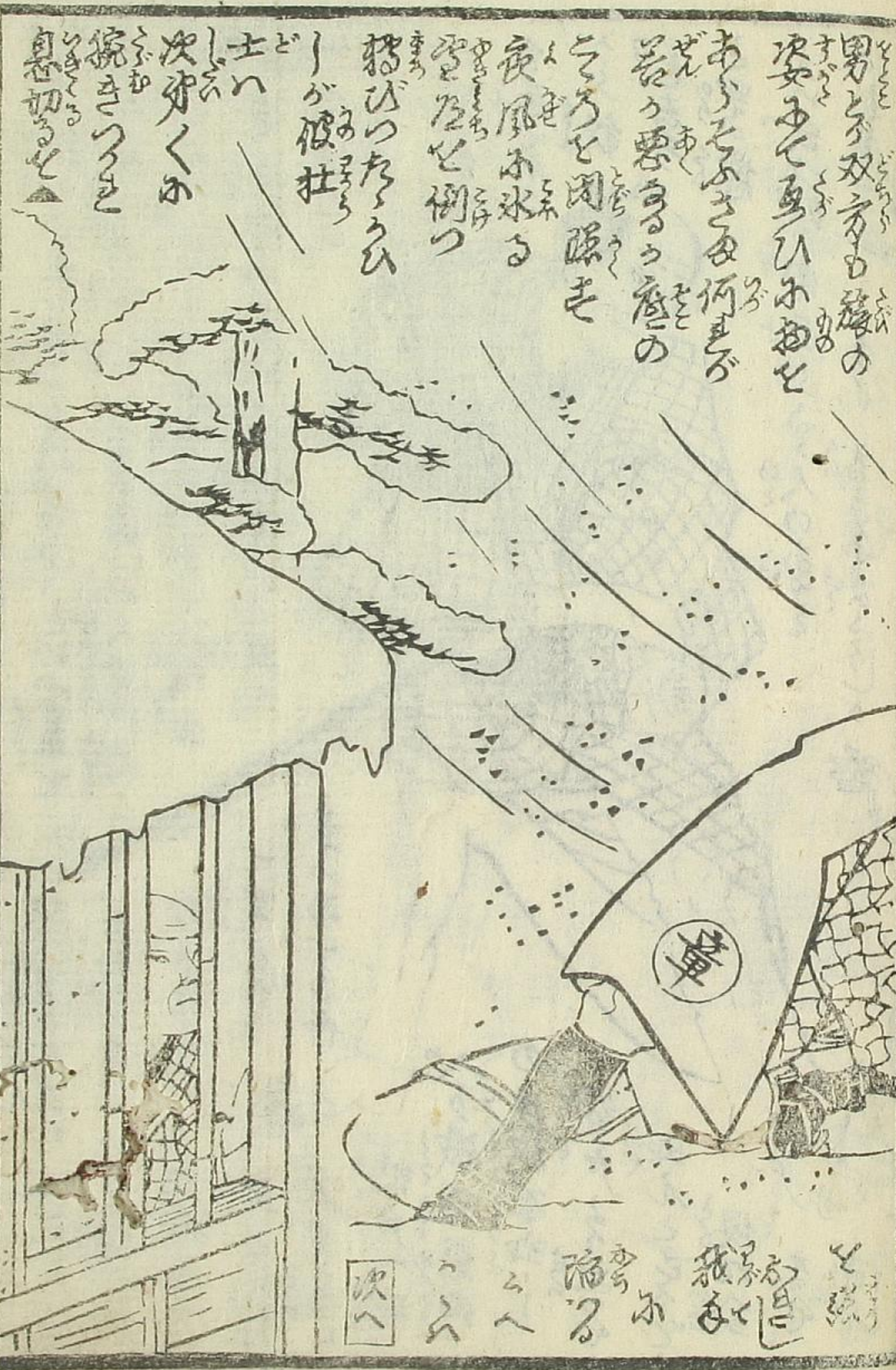
梅
壺

初
海

舟
種
画

舟
の

中
の
お
の
る
音
ん



男と女双方も縁の
 決まりて身ひおれ
 あふそふさ何まが
 らう悪まう悪の
 らうと因縁ま
 夜風ふ氷る
 雪をど例つ
 掃びつちうい
 しが彼社
 士い
 決すくか
 鏡きつと
 自切ると

再五五五五

と
 我
 臨
 次へ



つきの
 まつ香
 ろぐれ
 露り
 う個い
 露る
 何事
 やら
 と
 戸の障
 よう露
 ふ外
 年の以二十二の
 仕士と四十ふのの

此曲者の名後の
 巻あく分解る

彼
 て肩先
 藤下
 引つ
 眼と
 怒
 怒
 夜



とせん
多幸

事あるは
先方へ
さる由

威儀
あひ
ひ

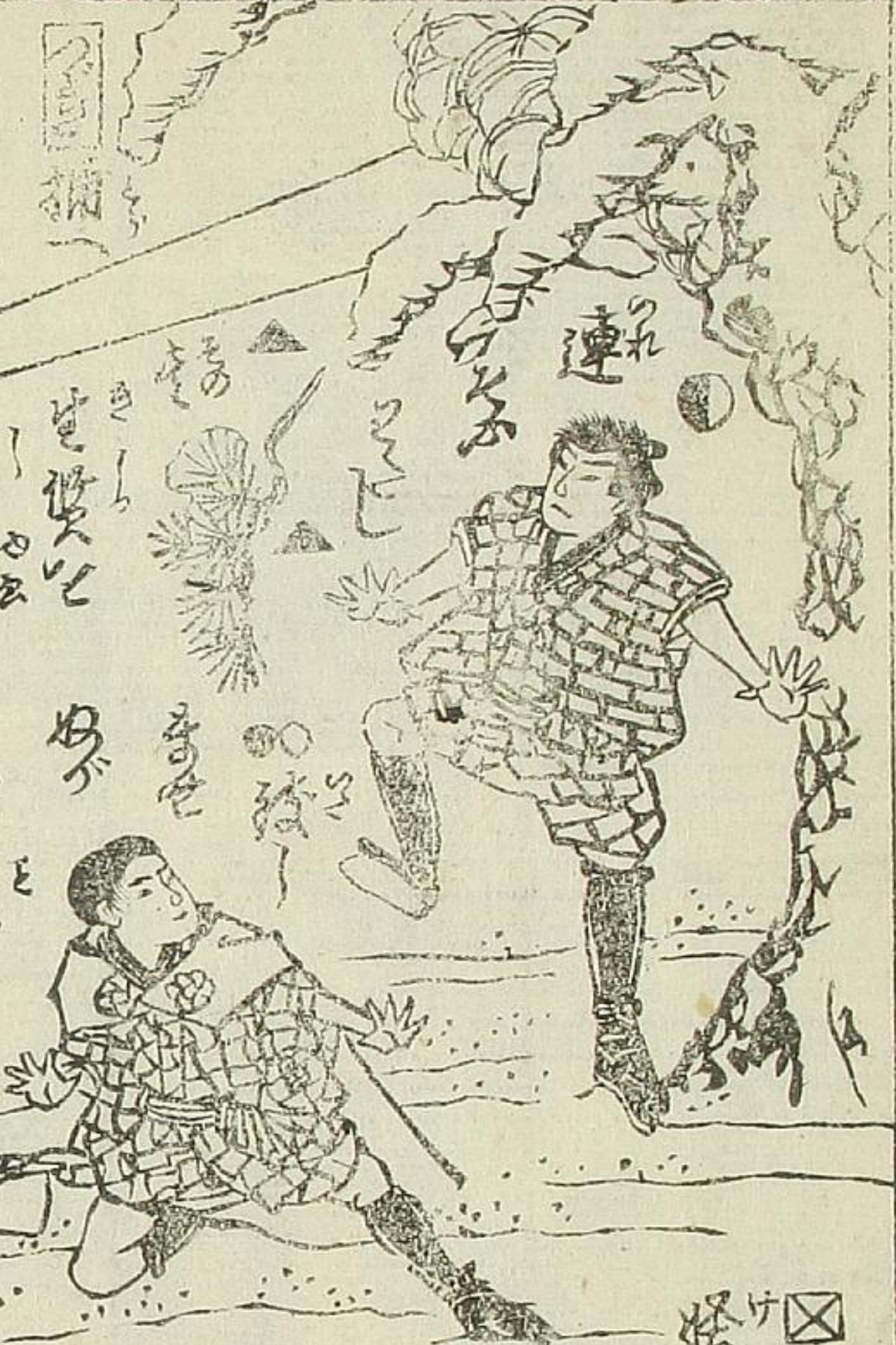
ていふやう
お下さんの
使客に
渡ぬの

止め
ゆる放
ひとと

まへの
の

とやういふ世の
代と
大事と

さる
ぬ



ひとと
ゆる放
止め

血気の
の悪徳
盗賊
頼ま
何と云と
色ハ
とやういふ世の
代と
大事と



過ぎ 忘れぬひと
 己く
 松若小き
 個の面をわらけ
 石のわらけ
 葉の
 仕士と組
 折れぬ
 松の幹一
 と折れぬ
 谷間山
 松の幹一
 と折れぬ
 谷間山



破竹
 出籠の
 弾丸
 八個
 の五
 なるけり
 あらぬ

一馬五重刀

八三三三

五

四

不意に救れりけし一帯に驚く
おぼやかしきありと名をひら
んて天小箱及奥の箱は
とては士おとそとあはれに

とては士おとそとあはれに
とては士おとそとあはれに
とては士おとそとあはれに

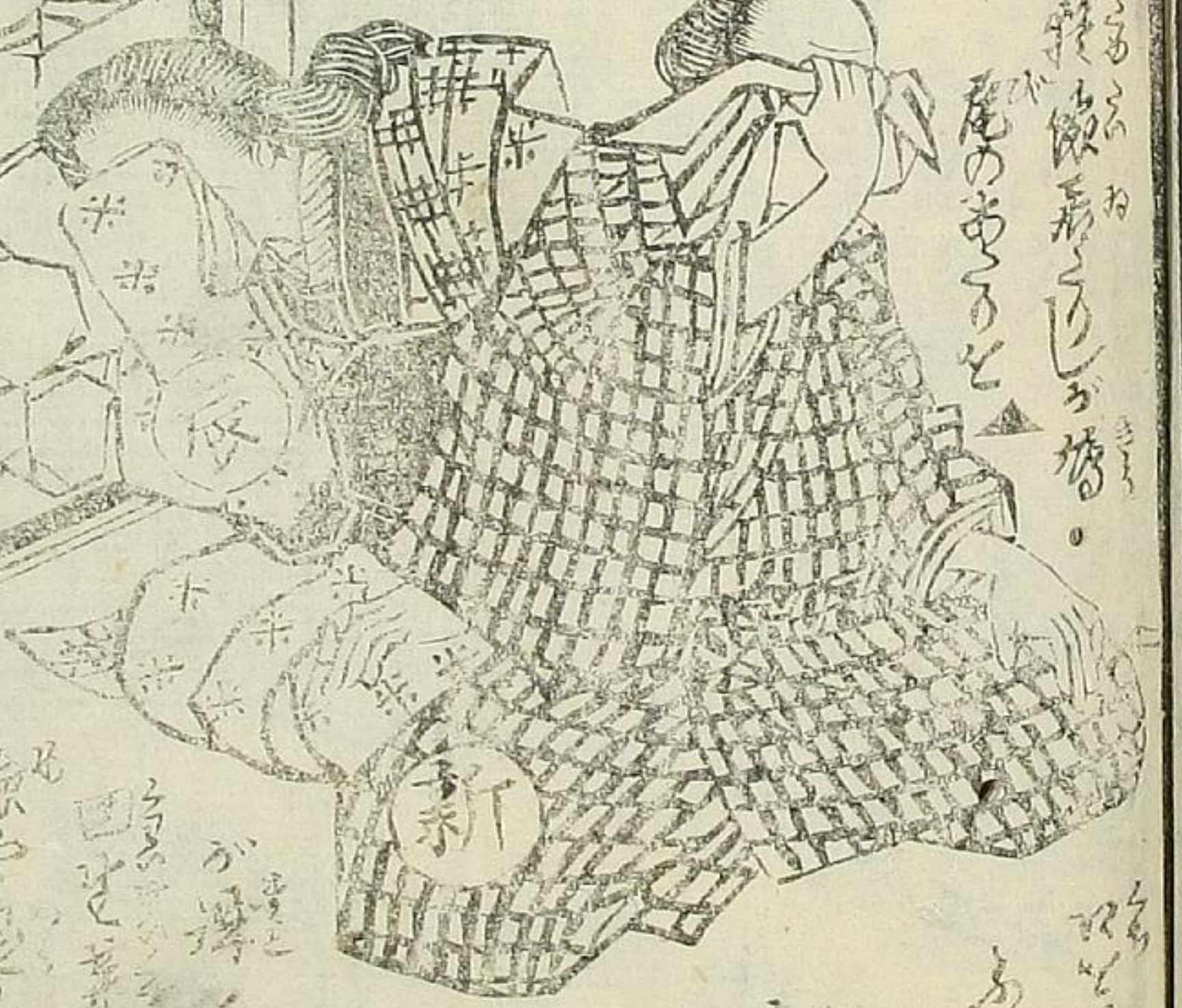
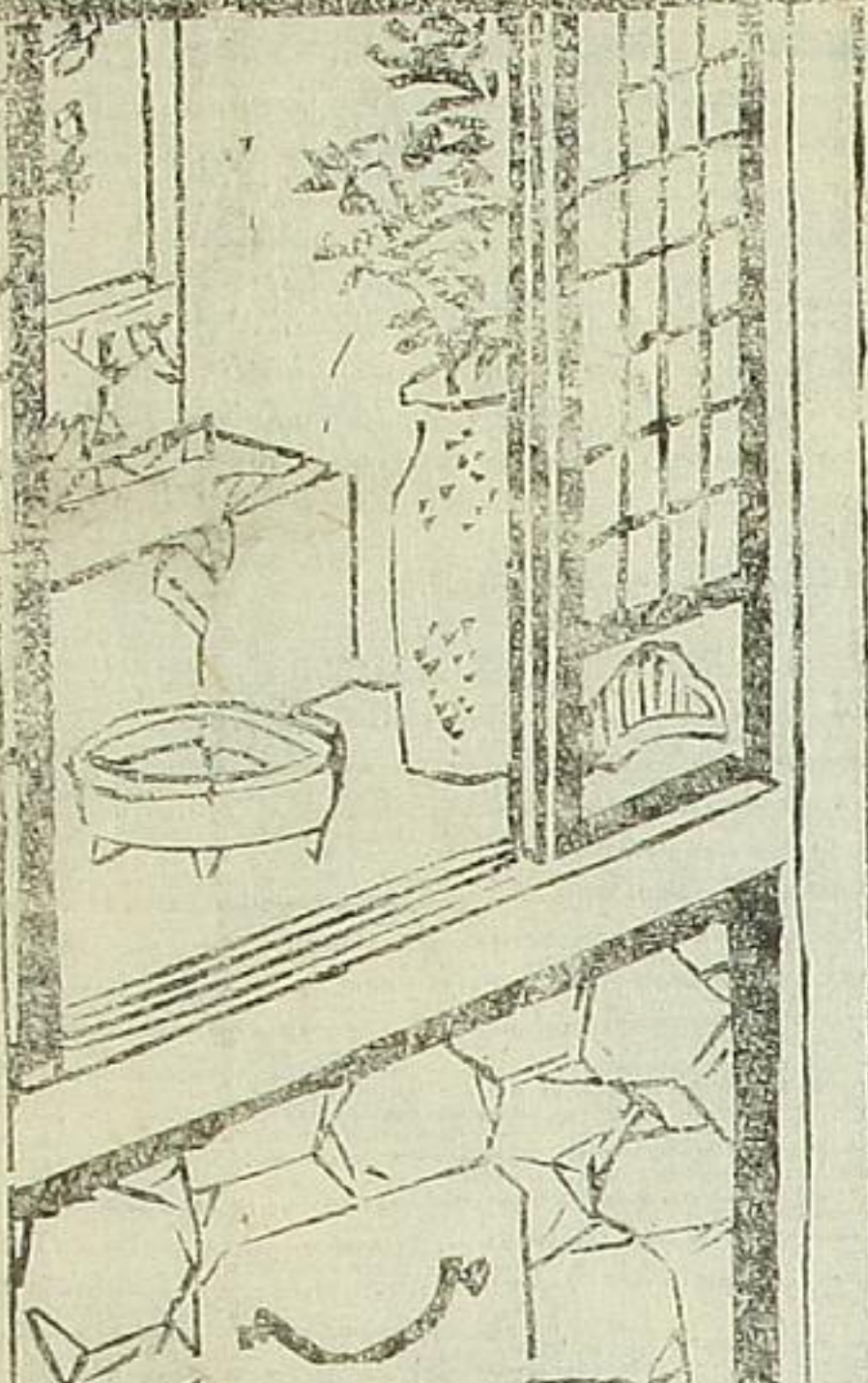
とては士おとそとあはれに
とては士おとそとあはれに
とては士おとそとあはれに

とては士おとそとあはれに
とては士おとそとあはれに
とては士おとそとあはれに



試みる
小箱と
奥の箱
とては士
おとそと
あはれに
とては士
おとそと
あはれに

今救せし後徳ふあはれに
守吸の瓶と蓋と切入り入事
不意の象取ふを個の大きふ
とては士おとそとあはれに
とては士おとそとあはれに



とては士おとそとあはれに
とては士おとそとあはれに
とては士おとそとあはれに

つぎ 百個の箱

あひて 壯士

如何なる

通の道



どりし ながが 附は せうも

あきま せむと あり

〇 びん 壯士

花 あり

望 たり

せう 人 我 魂 の

徳 と 雨 と あり

今 日 君 達

内 身 跡 が 残

け 小 崎 け せ

累 一 切 の

吾 輩 と あり

東 京 の

後 容

依 後

馬下の危難とある
あのかげは なる 裏と
申し 合 せ 市 の 間 隙 且 不

お 殺 せ ば 一 度 後 世 の 弾 丸 の 雨 と 由
穢 の 何 處 へ 狂 邪 一 が 者 へ 却 ツ 七
初 色 々 威 一 丸

此 所 と 次 の 画 へ
新 兵 衛 が 章
物 が づ り の 様
と 写 出 せ 也

焼 き せ 一 と 戀
一 と せ 坂 抱 せ



東京 何 ぞ
炎 の 甲 斐
あ だ ら ね
や ち の 鳥
せ と 雲 じ

中 長

あ の と

あ の 家 へ

礼 せ の ぐ ん

と せ じ ん の せ

先 生 だ せ ば

半 分 可 び

百 個 の 云

や ち 一 人 だ

礼 八 段 の

お ち せ ち

お ち せ ち

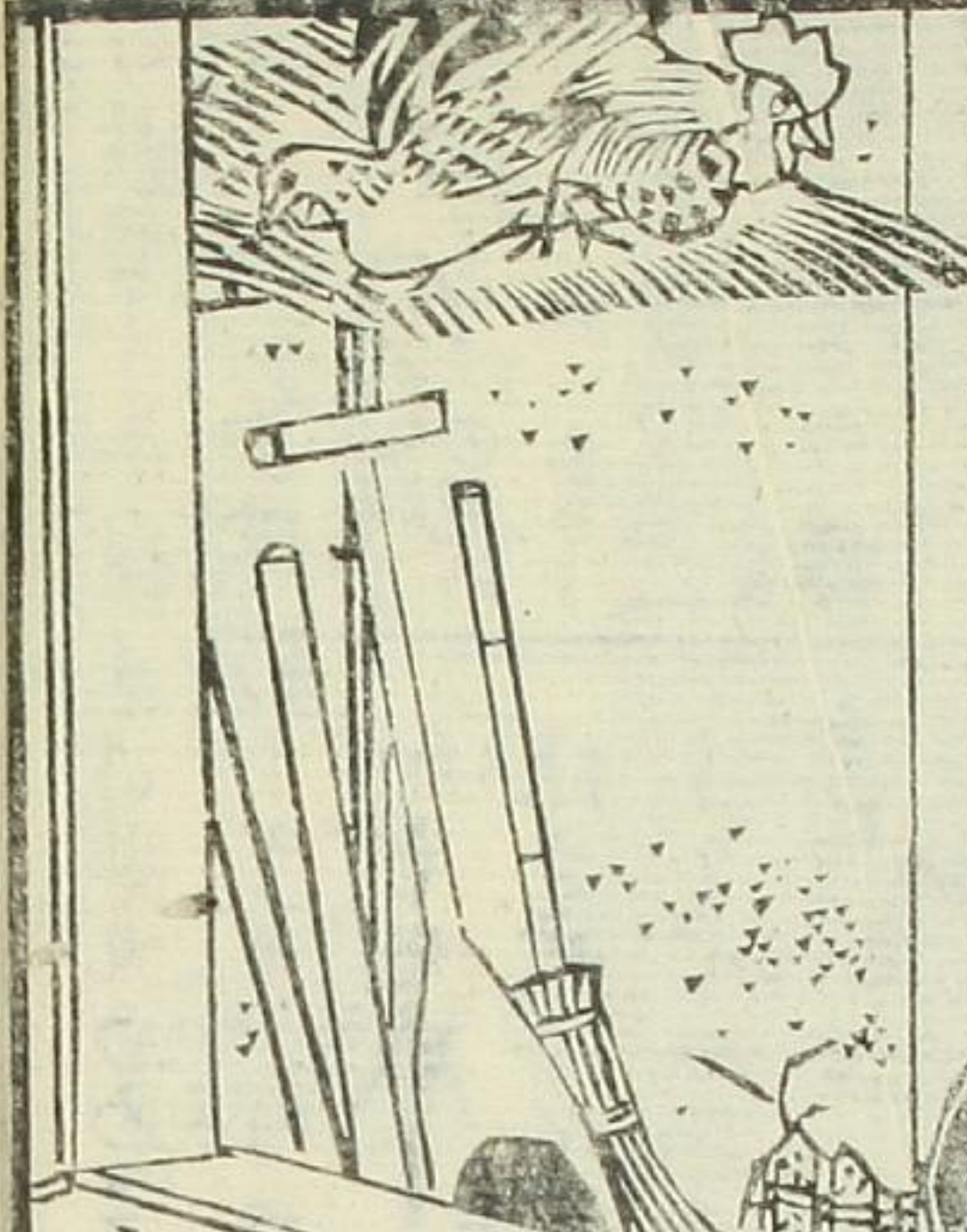
た れ と 次

つぎに石小居るのい甚きこと
同由緒も自裁
宅の困頓甚
の傍心怨ん
みんと交結の
老のさ記ふまら全

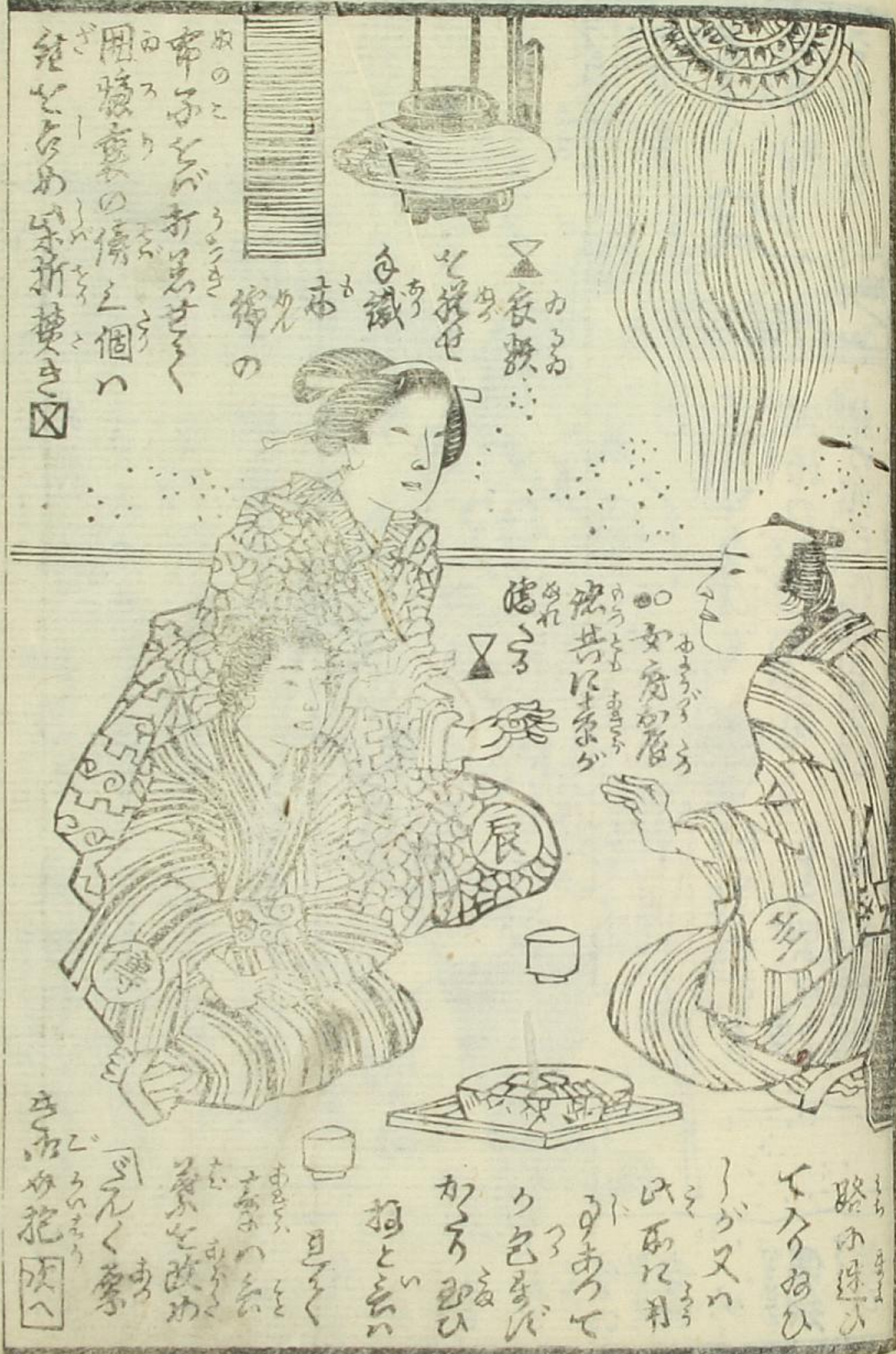


各自以と息
此より乃り
対を個へまに
向ひ一見中せか
幸まき若く
其の一人縁
とあるか

何と
より何と
ゆらゆら
物も何と
此より何と
たてま
と事



九
と事



常ふと打ささく
困頓甚の傍心怨ん
老のさ記ふまら全

白織
と事
と事

女房の居
共はまら

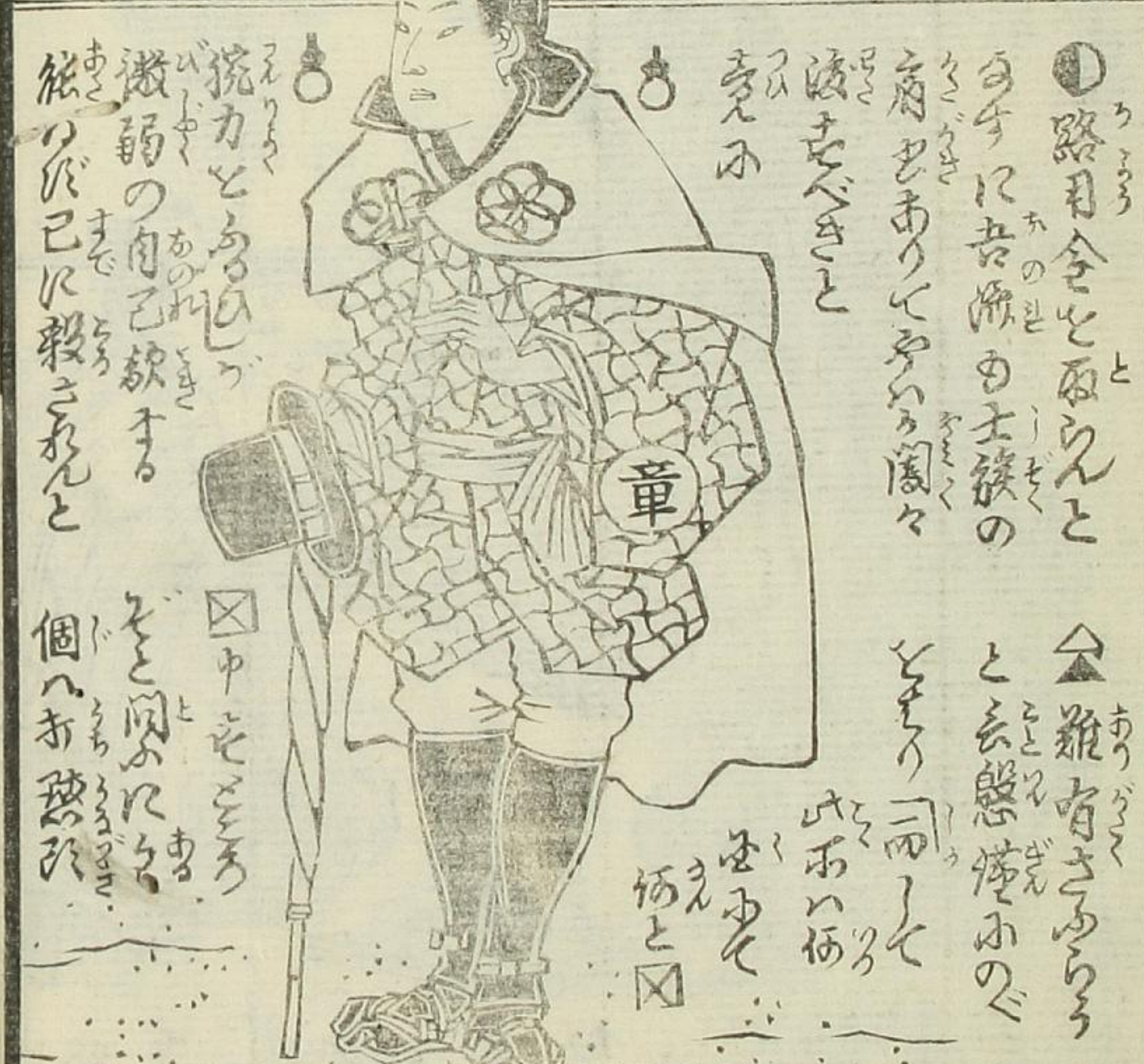
路の迷ひ
て今おひ
が又の
此より何と
みあつて
り色を以
かろむひ
指と云ひ
目と云
たまのい
を改め
とんく
きか花
次へ



中なるものは
 熊下は月
 の素直は
 の事大谷
 打たれ
 事と事
 ので又
 別小速
 昔世
 要もの

新
 長
 新
 己に殺
 己に殺
 己に殺

新
 己に殺
 己に殺
 己に殺
 己に殺
 己に殺
 己に殺
 己に殺
 己に殺
 己に殺
 己に殺



老
 受
 老
 老

老
 受
 老
 老

章
 己に殺
 己に殺
 己に殺
 己に殺
 己に殺
 己に殺
 己に殺
 己に殺
 己に殺

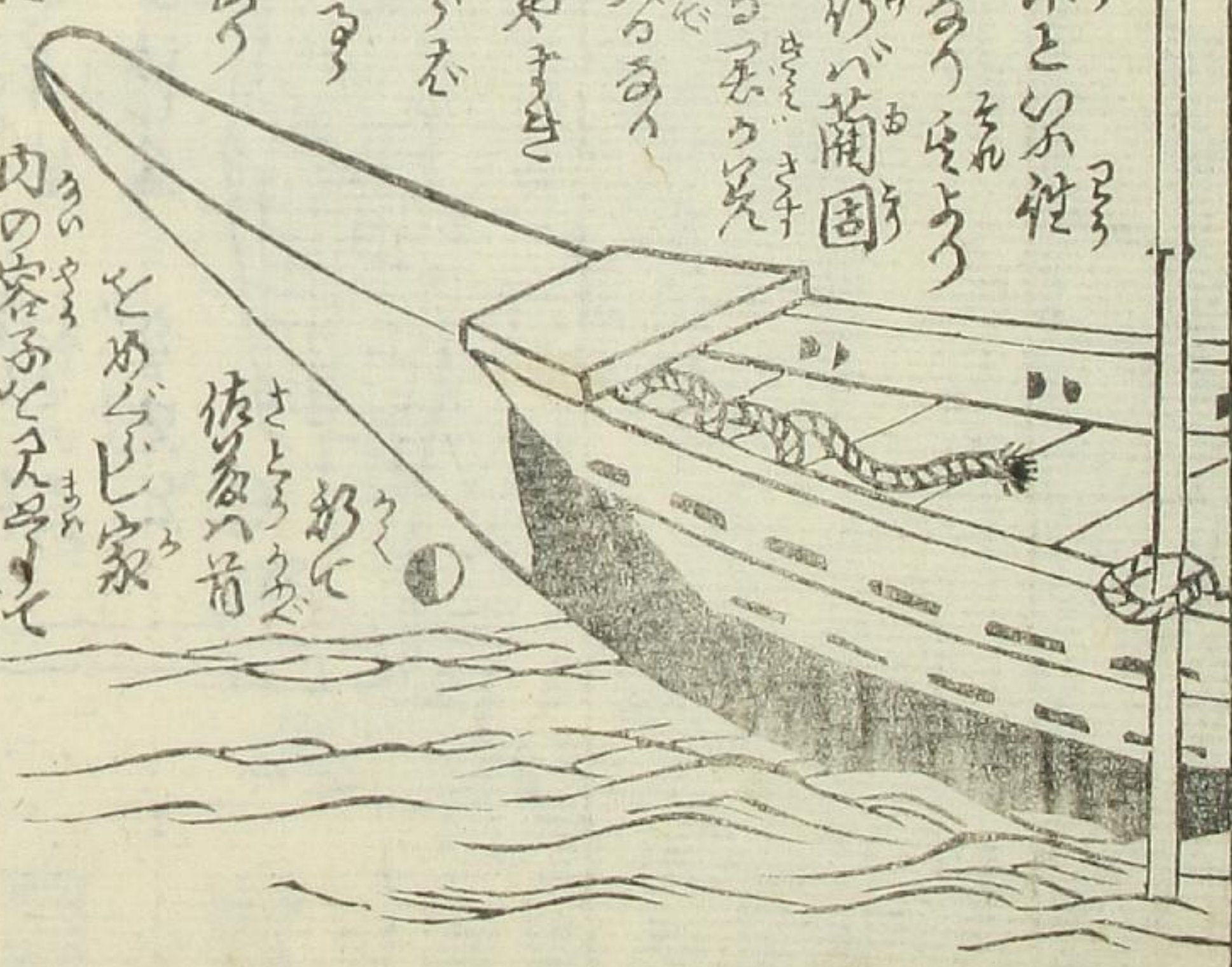
章
 己に殺
 己に殺
 己に殺
 己に殺
 己に殺
 己に殺
 己に殺
 己に殺
 己に殺

武甲

山と云々山の間中て大谷
 村と云々距離十里に及ぶ
 屯宅より及と小へあり
 一里をうろけて一筋の
 枝流ありを所と浦と村
 とのひま川に流るる
 仍に武甲山の林あり
 新敷との所更に出る
 所ありの所の松
 海ありを流り
 て久那 平仁田の
 五村をまわつたべ

▲小理京と云々
 遷之智あり
 更西ては南園
 山の林あり
 大谷村へあり
 其路のゆやまき

夜明ての
 春の田の
 とあり掛の
 と書示す
 春の春は
 女あり



とめが
 佐多
 内の容
 夕草示
 下へ

荒磯割京鯉魚腸

五編 久保田彦作 著
 守川周重画

渡辺文京作
 竹離の菊標鏡 三編 切

渡辺文京作
 金花胡蝶 三編 切

孟育芳虎画
 冬見立闇鳩 三編 切

篠田仙果作
 藻塩草近世奇談 三編 切

吉錦繪問屋

日本橋區兩國吉川町五番地
 青盛堂 加賀屋 堤吉兵衛

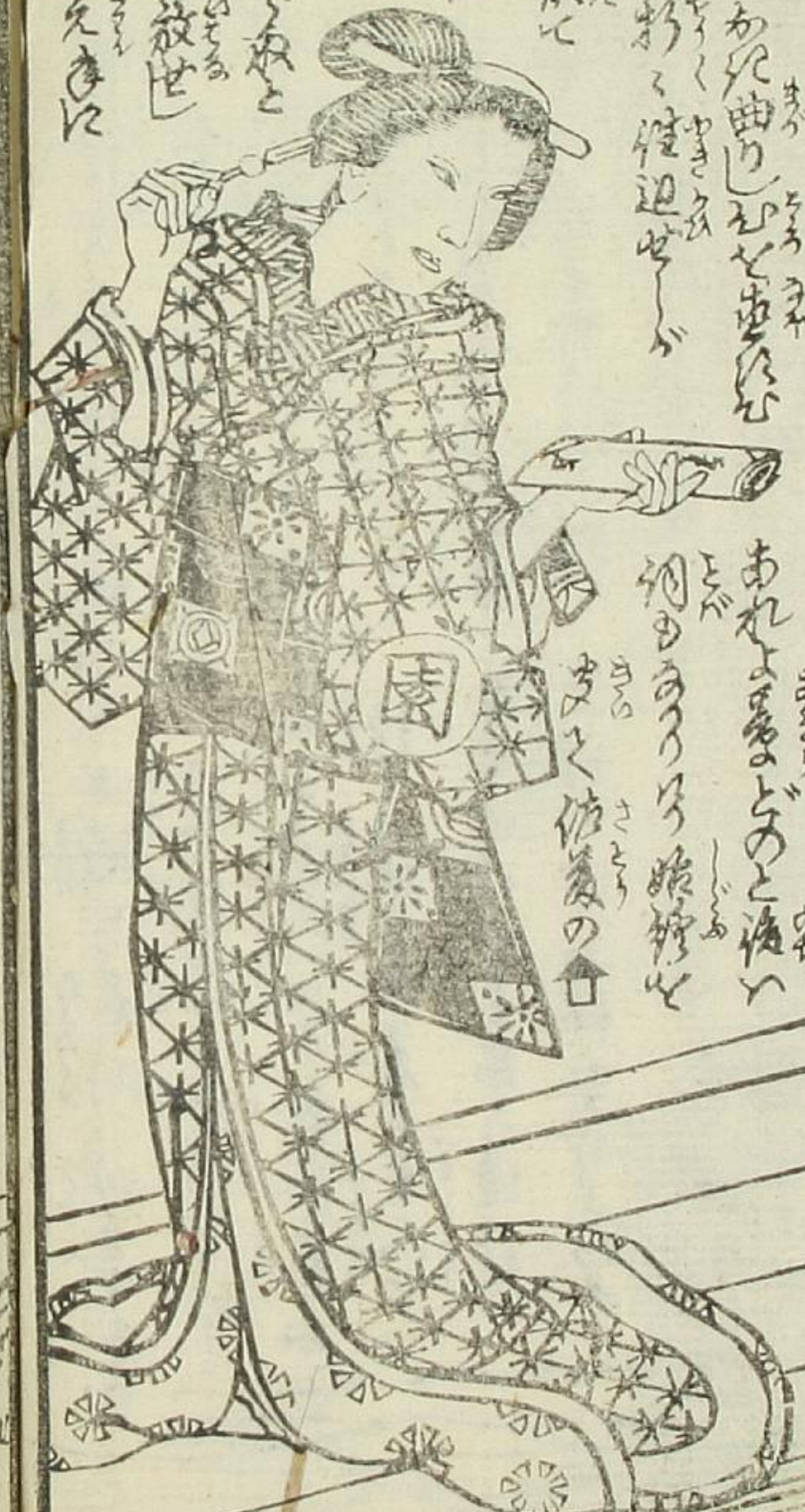


青盛堂 壽梓

青盛堂 壽梓



つぎの柄を振りし十郎之妻
 其の著書は九葉の樹は
 て己の祈りんとあはれとて
 妻が世に乞ひ祈り不絶する
 中倉村の農家も清き水の
 方へ祈りかた曲りしとて
 治お度へ祈り住せせ
 五郎海へ縁に
 其の著書は
 不へん返らぬと
 心強くを放せ
 聖徳治えきに



あはれとて送ねば
 左の芳名は
 抱き合ふは
 子室と持たせ
 まつりし昔昔を
 あれよまよとの後
 何ものも
 まつりし昔昔の
 心

徳川徳川は
 後地を
 命の
 吾流
 遊ん
 多く
 不りて
 日夜の
 新去
 今幸
 あふん
 妨げ
 親の

徳川徳川は
 後地を
 命の
 吾流
 遊ん
 多く
 不りて
 日夜の
 新去
 今幸
 あふん
 妨げ
 親の

扇玉三草下

二

片巻
 奉巻
 絶味
 子
 臣弟

つぎ

小首

と便

け

容

子

妻

と

つと

一

貴

取



幼少とこれ少少さるる旅人の

金物ゆへに侍候する人

御けり候の意はひきかへ

なき妻の如くおぼしめ

てに別れを言ひま

降と云ひ候はしは親

子が今も今も河津

舟中の御座るを遭

河の孤艇と云はく給

それと云ふも涙を先

なる事は一々承知

は日費を志

懐中へ収めたり

舟の憂を嘆つて月夜に

あふらるに御座り候

ぬふるはうち入おのこ

若くは一箇ふれりて

物案ハ荒川の橋おた

めて中まと定ぬ候

事か今も今も二月の初旬

候と云はして此ま世ま

燭虫一々の候り候

月田の子候はま

結生物ぬと候りて

ゆは夜の難いあり

下流流ありて

燭滴の

機嫌よく

喋り候は

小一物あり

は人さる

はむらに

金魚や

ゆめいと

茶燭と

是も物

のまこと

只引候り

夢のま

のまに

おと

これ

若小

世

の

附

あ

樹

若

は

は

傳

おと

遠の

東へ

て

の

作

兄

願

文

際

て

次

と

難

人

夜

る

著

身

車

う

ま

あ

葉

の

て

を

は

は

そ

ま

ね

丸

回

れ

つ

の

馬五章 下

三

つぎ 手紙取返し 別巻之と

細い糸と見出し

何れも

取上げておれ

上書きを

さぬき

すけ

中々取返し

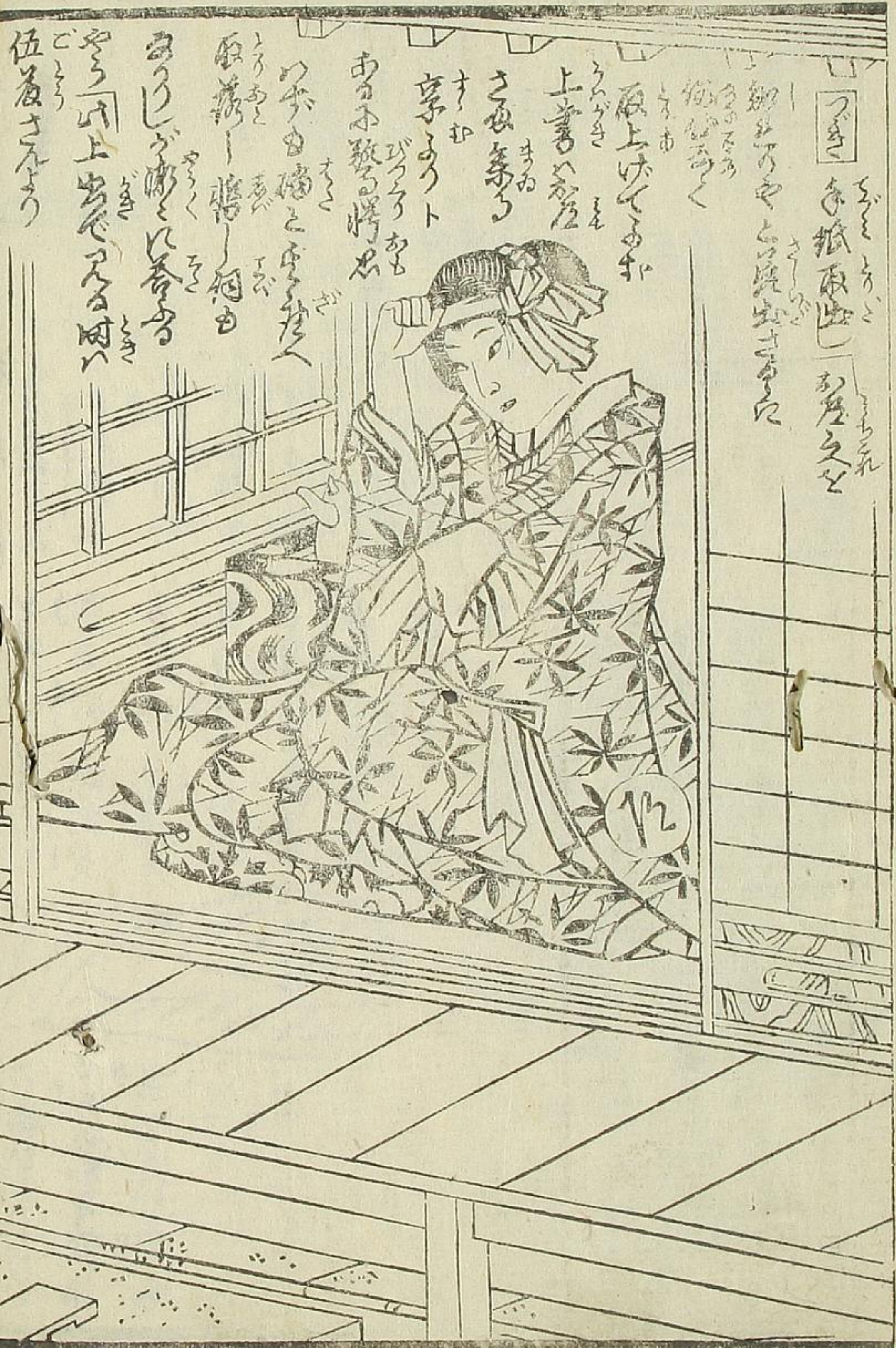
ひた白磁と申す

取返し 借し相も

さし上げぬ

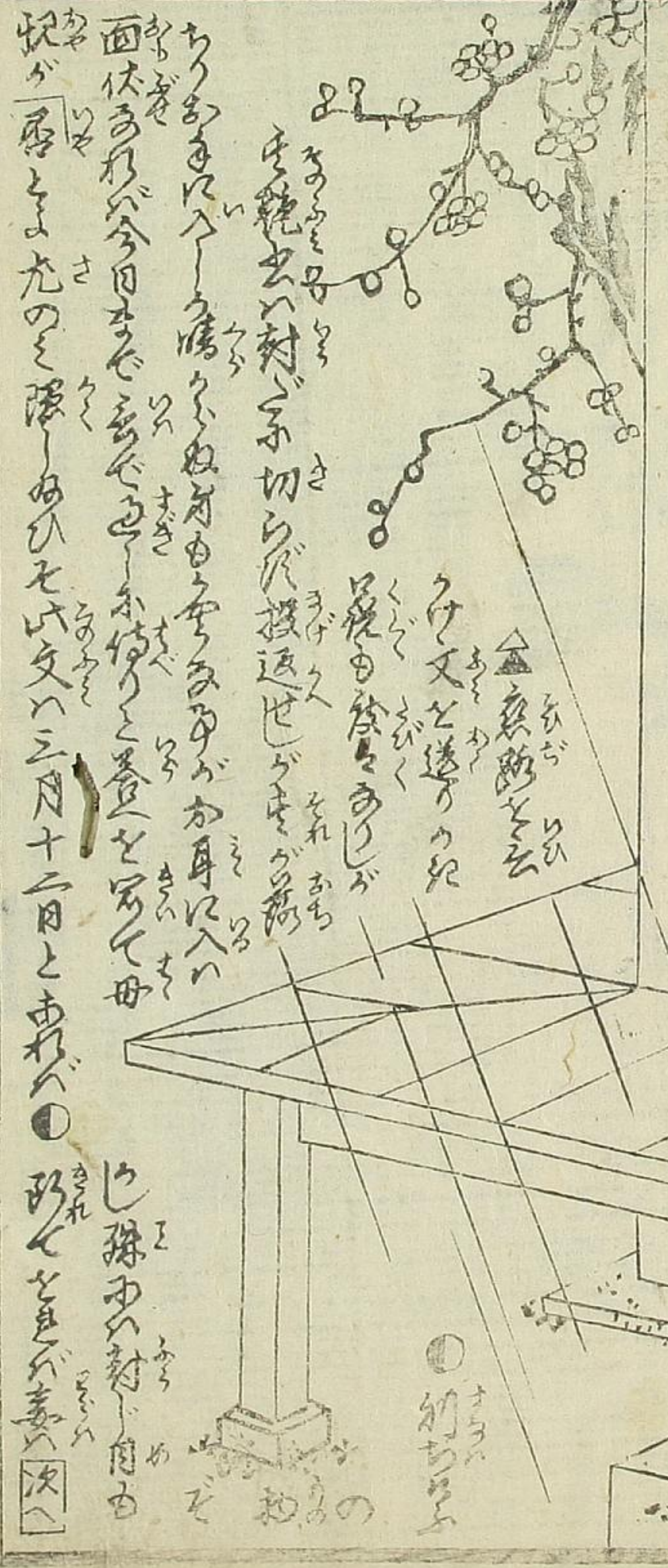
さし上げぬ

伍番さし上げ



妻へ書 文を
申す 文を
先づかして入る
さし上げぬ

△ 取返しと云
くけ文と送るなり
後由候とありが



ちりあまに... 手紙... 取返し... 三月十二日とある

△ 取返しと云
くけ文と送るなり
後由候とありが

ついで疾小園でござるもせありて
 白の影も多し 湯衣をまきへても
 ありては 疾小園の 湯衣をまきへても
 ありては 疾小園の 湯衣をまきへても

文と後ししれといふも何おも
 小直実を更せんがう
 南のあも母の相へははぬとあひ
 震さるうらさ

あつちの由依む文へ一月の本の
 一にこれ
 笑羽来りの下の人君と吾藩の
 老體と徳ひ重なる物ふ

侍りては 疾小園の 湯衣をまきへても
 ありては 疾小園の 湯衣をまきへても
 ありては 疾小園の 湯衣をまきへても

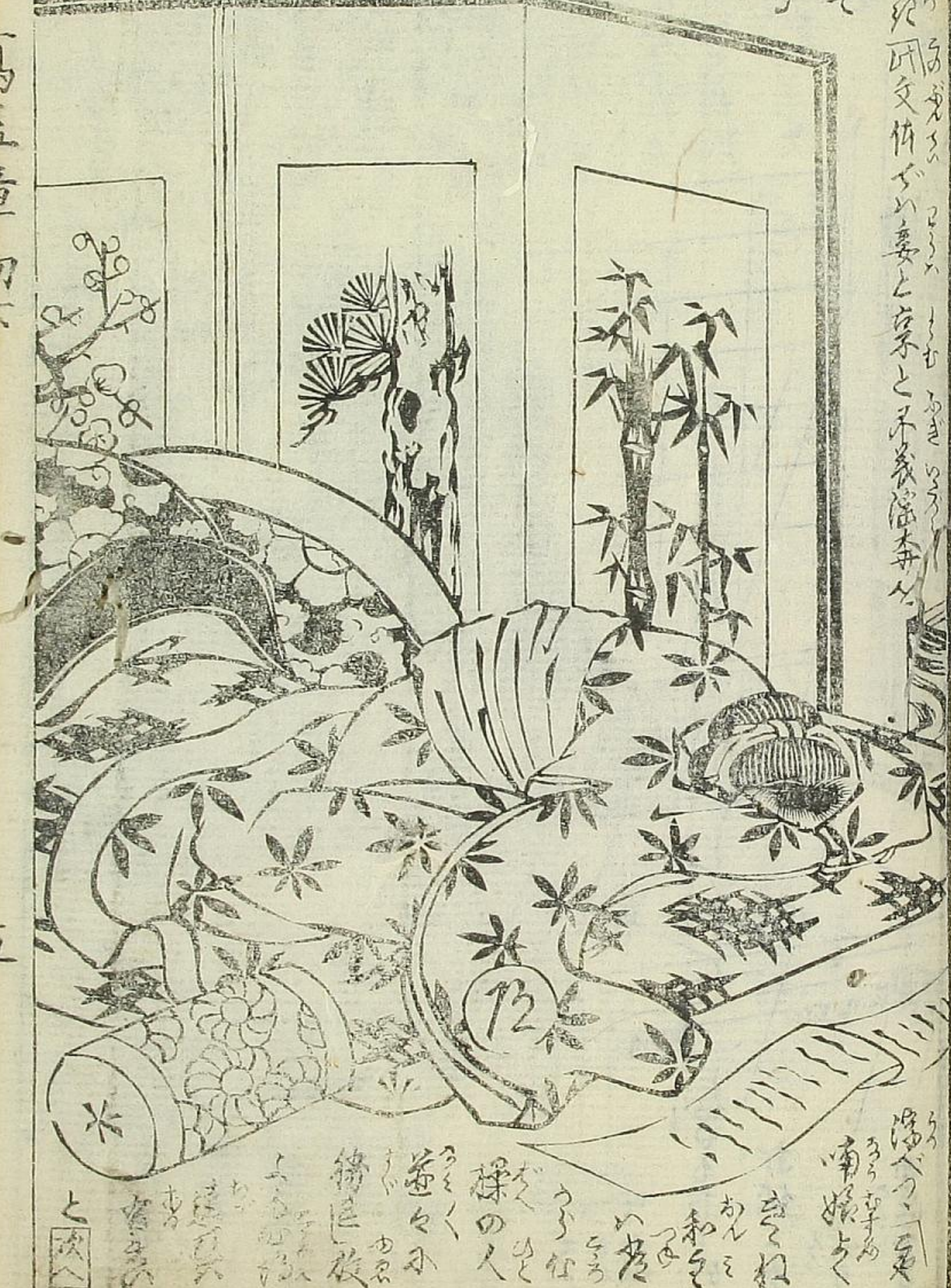
残せりや由有ゆま 今宵十二時頃例の
 ありては 疾小園の 湯衣をまきへても
 ありては 疾小園の 湯衣をまきへても
 ありては 疾小園の 湯衣をまきへても

さるやうは下されざるは
 あには技りし下侍子とてかたじけなく



疾小園の 湯衣をまきへても
 ありては 疾小園の 湯衣をまきへても
 ありては 疾小園の 湯衣をまきへても

白の影も多し 湯衣をまきへても



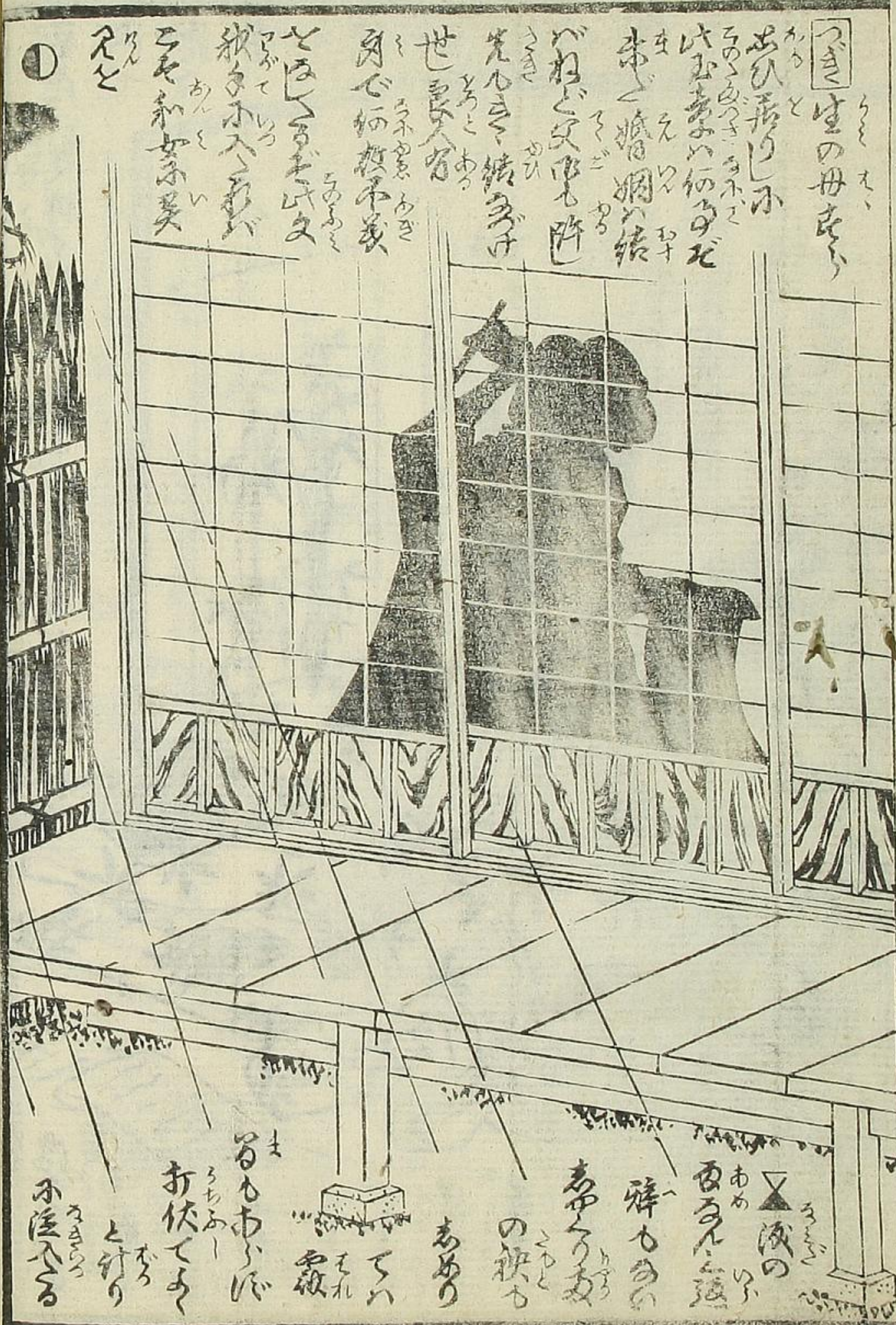
あつちの由依む文へ一月の本の
 一にこれ
 笑羽来りの下の人君と吾藩の
 老體と徳ひ重なる物ふ

侍りては 疾小園の 湯衣をまきへても
 ありては 疾小園の 湯衣をまきへても
 ありては 疾小園の 湯衣をまきへても

残せりや由有ゆま 今宵十二時頃例の
 ありては 疾小園の 湯衣をまきへても
 ありては 疾小園の 湯衣をまきへても
 ありては 疾小園の 湯衣をまきへても

さるやうは下されざるは
 あには技りし下侍子とてかたじけなく

つぎの母を
あひ形しし
はまきい何ぞ
本之婿婿の結
はねと父中門
先心之結多子
世良人者
月心何故不義
とほくをたけ文
秋子不入る
とを和女美
えと



△波の
あめ
百るん
群るの
帯るの
の袂
あめり
るもあふ
お伏て
と行り
おほる



心まき王心や
父状のまけい
ハ士族密圖の最後
△ヨモモを侍ての志れま
る小心の附置てけ名不
威し懋しつ後漢の懸
娘も大子父状の母へ入
は詔を又依き強美を
るは月の清衣の懸るる

おそふくと
はと返解心
の一百は
教候が
とて
てかちり又
アノ玉素妻は
世久状不又
築く曲者ゆが

中より有る正

あふんが落る不

妻が為今日方

信をら秋さあもい

編笠を救いせぬ

綱量も何れも死

と我身と嘆ちせと

眼も母が都を

疑ふてか出故

さあがか降り小

とよけ替姻へ破

俣小あふん氏と

とめい... 汚らむと増え

一筆強一ニウ虫

先主不意の

か徳をせん

と波の淵不

是れ世の縁の

おぼやかし

初夜告る

縁と嘆き

難の卜

居る一個の男



忍

身

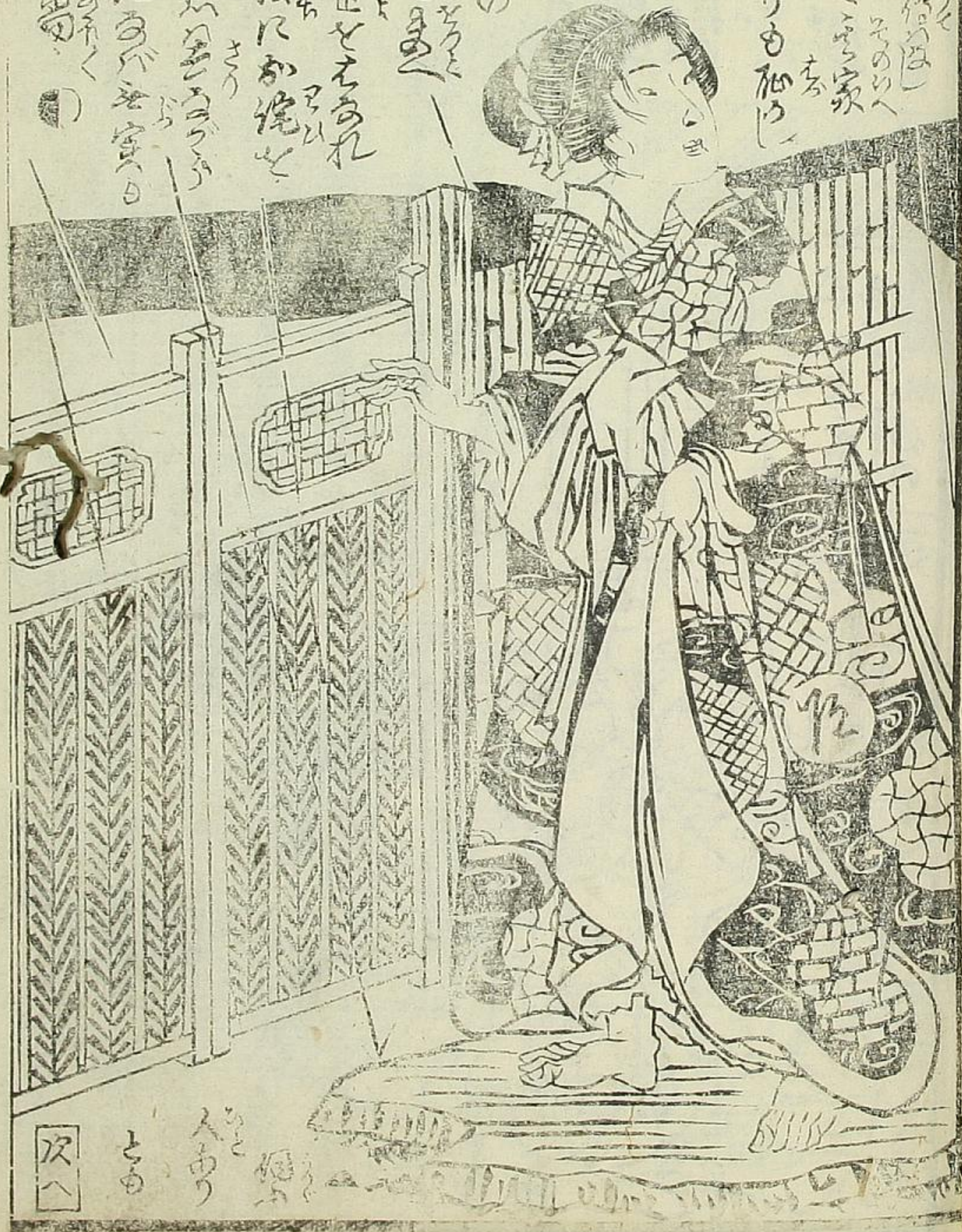
海

疾

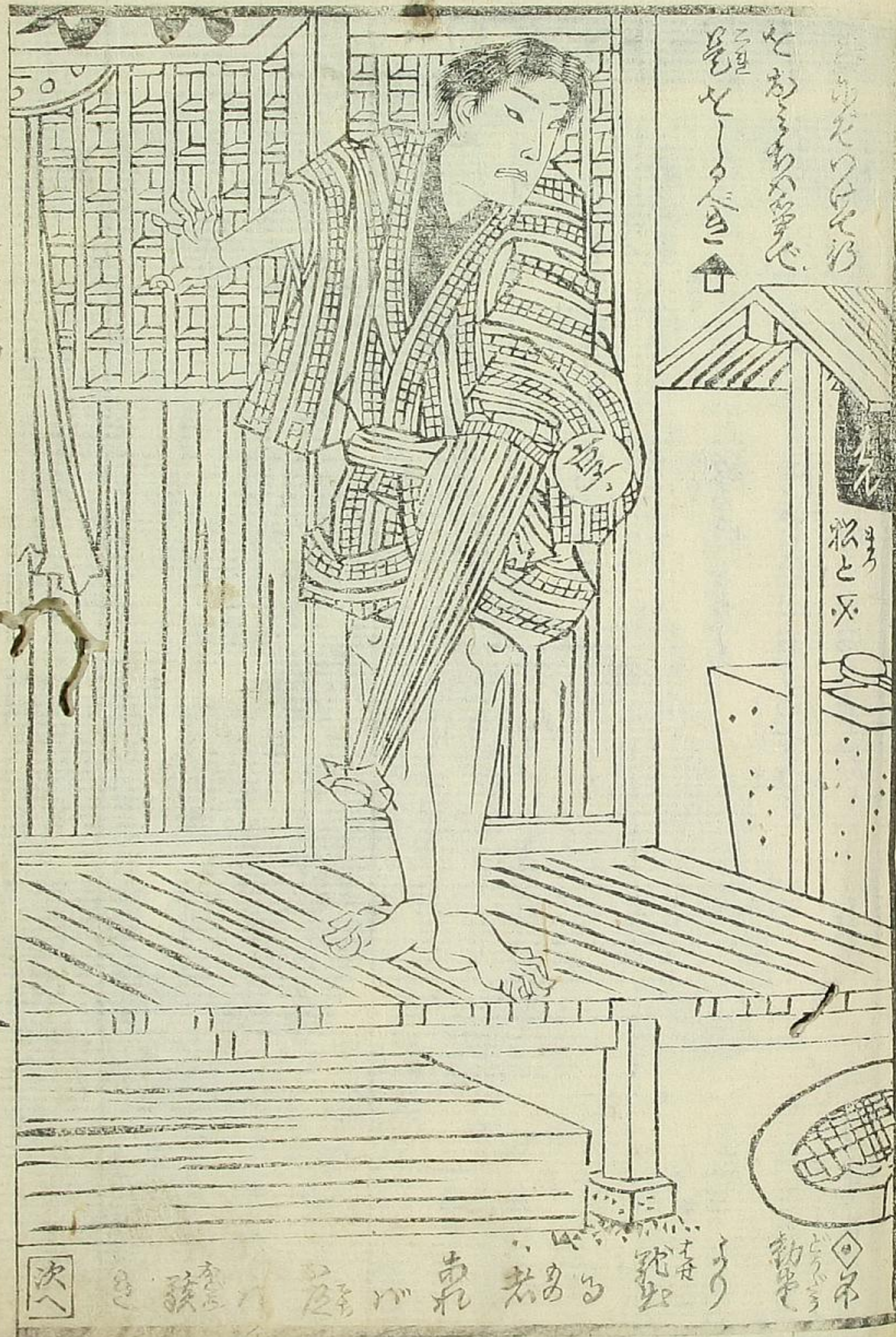
か

あ

多海由... 一度... 母... 疑... さあ... とよけ... 俣小...



忍



此の人の名は
 何れとも知らず
 是れは人の名
 也

馬五重刀下

次へ
 是れは人の名
 也

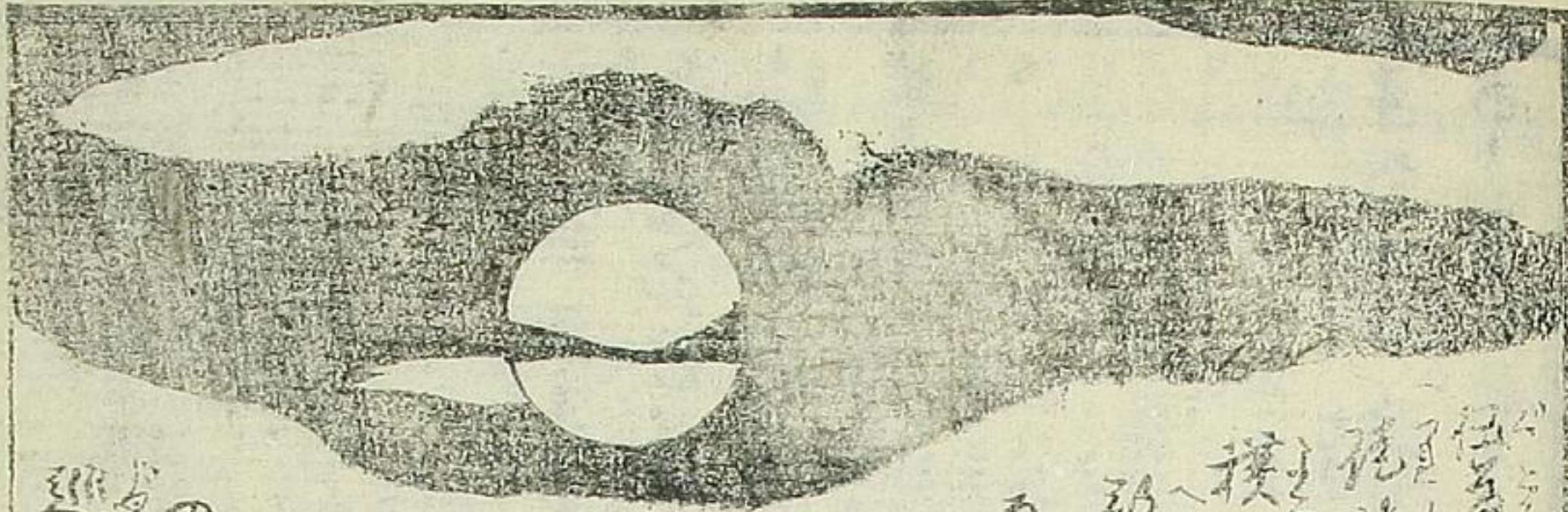


此の人の名は
 何れとも知らず
 是れは人の名
 也

東糖
 納奉
 此の人の名は
 何れとも知らず
 是れは人の名
 也

納奉
 此の人の名は
 何れとも知らず
 是れは人の名
 也

馬五重刀下



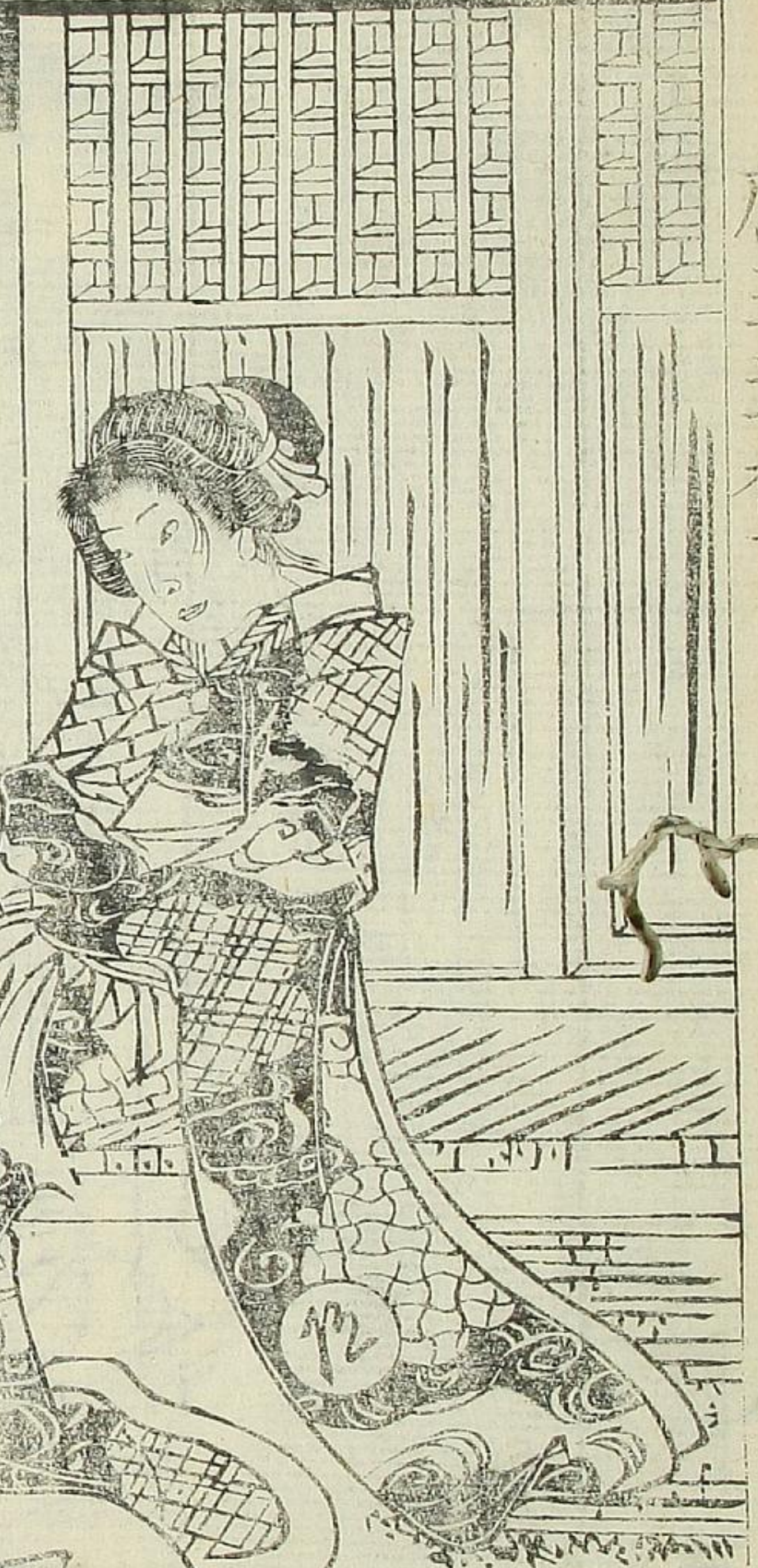
巡査の事由と傍に
の急路も滑り
と飛りあひ



吾等の始末の絶え
をすの事も
と

おのりおのり今宵おのりおのりおのりおのりおのり

おのりおのりおのりおのりおのり



つぎ星の光りかよく
まへ別人あつた
有らばおのりおのりおのり

と哲因達方
おのりおのりおのり

おのりおのりおのり

おのりおのりおのり

おのりおのりおのり

おのりおのりおのり

おのりおのりおのり

おのりおのりおのり

おのりおのりおのり

相模瘦厨房種画

此の種画は、相模の瘦厨房に用いられるもので、その特色は、人物の描き方が、一種の写実的であり、かつ、その背景に、自然の風景が描かれている点にある。これは、江戸時代の浮世絵画の発展の一環として、より多様な表現を追求した結果として生まれたものである。特に、この種画は、その構図の巧みさと、人物の表情の豊かさに、高く評価されている。

明治十四年九月五日
御届
本橋町一丁目十五番地
編輯人 伊東專三
日本橋区吉川町五番地
出板人 堤吉兵衛

荒磯割烹鯉魚腸

五編 久保田彦作著 守川周重画

竹離の菊標鏡

三編 渡辺文京作 守川周重画

冬之見立闇鳩

三編 藤田仙果作 守川周重画

藻塩草近世奇談

三編 孟斎芳虎画

舎錦繪問屋

日本橋區兩國吉川町五番地
青盛堂 加賀屋 堤吉兵衛



010190514647



